

# 瓜生堂遺跡第59次発掘調査報告書

二〇二四年三月

2024.3

東大阪市



## はしがき

瓜生堂遺跡は、弥生時代の拠点集落として著名です。とくに小阪ポンプ場で見つかった第2号方形周溝墓は、近畿の弥生時代の墓制や社会構造を考える上で好適例として、中学校の社会科教科書にも掲載されています。

本遺跡は、昭和40年（1965）の遺跡発見以来、これまで本例を含め59次の調査が実施されてきました。地下深くに埋没してきたことから、遺跡の保存状態は極めて良好で、前記の弥生時代の方形周溝墓などの遺構のほか、質的、量的に多彩な出土遺物があります。これまでの調査で、本遺跡は、弥生時代中期前半の中ごろに、当時の河内湖の南岸に営まれ、同中期後半に、その範囲を拡大した集落であることがわかつてきました。

いっぽう、本遺跡の一部には、弥生時代の遺構面の上層に、奈良時代から平安時代の集落関連の遺構が広がることも明らかになってきました。今回発掘調査を実施した第59次の調査地もその一つです。今回の調査地を含む瓜生堂遺跡一帯は、河内国若江郡の一部で古代集落や寺院が点在し人々の多様な暮らしぶりを見る事ができます。

本書では、現地調査の記録、遺物整理の図面写真を掲載し、今回の調査成果をとりまとめました。本書が地域の歴史の一端を物語る資料として、市民の皆様に広くご活用賜りますと幸いです。

最後になりましたが、発掘調査や遺物整理の費用のご負担など、多大なご協力を賜りました、美樹工業株式会社はじめ関係各位のみなさまに厚くお礼申し上げます。

令和6年3月

東大阪市

## 例　言

1. 本書は、共同住宅建設に伴い実施した、瓜生堂遺跡第59次発掘調査の報告書である。
2. 調査は、美樹工業株式会社（代表取締役社長岡田尚一郎）の依頼を受けて、東大阪市人権文化部文化室文化財課が実施した。
3. 現地の発掘調査、出土遺物の整理、報告書作成刊行等、調査にかかる経費は、美樹工業株式会社が全額負担した。
4. 発掘調査は、令和5年2月2日から2月28日まで行った。遺物整理及び報告書作成刊行は令和6年3月31日まで実施した。
5. 現地調査、遺物整理、及び報告書作成は、菅原章太・平松里緒・近野奈緒子が担当した。
6. 現地調査の機械掘削、人力掘削、基準点測量・地区杭打設は、美樹工業株式会社の依頼のもと、株式会社島田組が実施した。
7. 遺物整理は東大阪市との契約に基づき、株式会社文化財サービスが実施した。
8. 本書は、I～IVを菅原、Vを平松、VIを菅原・近野が執筆し、編集を近野が行った。
9. 考古学用語の表記・定義については、田中琢・佐原真 2002『日本考古学事典』（三省堂）の用例に従った。
10. 土層断面図の土色は農林水産省農林水産技術会議事務局監修『新版標準土色帳』に準拠し、記号表記もこれに従った。
11. 遺構については、次の略号を用いた。SP…ピット、SK…土坑、SE…井戸、SD…溝
12. 現地の調査にあたっては、美樹工業株式会社の全面的なご協力のもと、株式会社プレジオのご尽力があった。また近隣の方々のご協力を賜った。これらの方々に厚くお礼申し上げます。

## 目 次

I	調査に至る経過	1
II	位置と環境	2
III	瓜生堂遺跡古代集落の概要	4
IV	調査の概要	5
1)	調査の方法と地区割	5
2)	層位	6
3)	検出遺構	9
①	掘立柱建物・ピット	9
②	井戸	12
③	土坑	14
④	溝	15
V	出土遺物	16
1)	SE2 出土遺物	16
2)	その他遺構出土遺物	16
3)	包含層出土遺物	16
4)	試掘調査出土遺物	18
VI	まとめ	18

## 挿 図 目 次

第 1 図 調査地位置図	1
第 2 図 周辺遺跡分布図	3
第 3 図 第 54 次・59 次の調査トレンチと周辺の状況	5
第 4 図 第 59 次調査地地区割図	6
第 5 図 第 59 次調査地壁面断面図	7
第 6 図 検出遺構平面図	8
第 7 図 ピット・土坑 (SK1・4・7 を除く) の埋土の分布状況	10
第 8 図 SP33-27-21 の柱通り実測図	12
第 9 図 SE2 実測図	13
第 10 図 SD8・SK1・SP30 断面図	15
第 11 図 SE2 出土遺物実測図	17
第 12 図 SK3・SP61 出土遺物実測図	17
第 13 図 包含層出土遺物実測図	17
第 14 図 試掘出土遺物実測図	18

## 表 目 次

第 1 表 ピット一覧表	11
第 2 表 遺物観察表	20

## 図版目次

- 図版 1 遺構 1. 調査前の状況（南東から）  
2. 機械掘削状況（北東から）  
3. 3A (S) 区第4層内土器出土状況（北から）
- 図版 2 遺構 1. 3A (S) 区第4層内土師器皿他出土状況（北から）  
2. 3A (S) 区第4層内土師器羽釜一括出土状況（北から）  
3. 3A (S) 区第4層内土器出土状況（北から）
- 図版 3 遺構 1. 奈良～平安時代遺構検出状況（西から）  
2. 調査風景（北西から）  
3. SK3 内土師器皿出土状況（東から）
- 図版 4 遺構 1. SP61 内須恵器出土状況（東から）  
2. SD8 断面土層堆積状況（南から）  
3. SK3 柱痕跡検出状況（東から）
- 図版 5 遺構 1. 奈良～平安時代遺構掘削後の状況（西から）  
2. 同上、西半の近景（南から）  
3. 同上、東半の近景（北から）
- 図版 6 遺構 1. SE2 検出状況（南から）  
2. SE2 上層掘削後状況（南から）  
3. SE2 断ち割り井戸枠検出状況（南から）
- 図版 7 遺構 1. SE2 井戸枠（曲物）内遺物出土状況（東から）  
2. SE2 掘方掘削後曲物全景検出状況（南から）  
3. トレンチ西壁断面（A地点～B地点）
- 図版 8 遺構 1. トレンチ北壁断面（B地点～C地点）  
2. 調査作業終了後埋戻し状況（北西から）  
3. 調査終了埋戻し完了状況（南西から）
- 図版 9 遺物 1. SE2 出土 土師器甕  
2. SK3 出土 土師器坏  
3. 包含層出土 土師器坏  
4. 試掘調査出土 土師器坏
- 図版 10 遺構 1. SE2 出土遺物 土師器、須恵器、黒色土器、土製品、種子  
2. 各遺構出土遺物 土師器、須恵器、土製品



## I 調査に至る経過

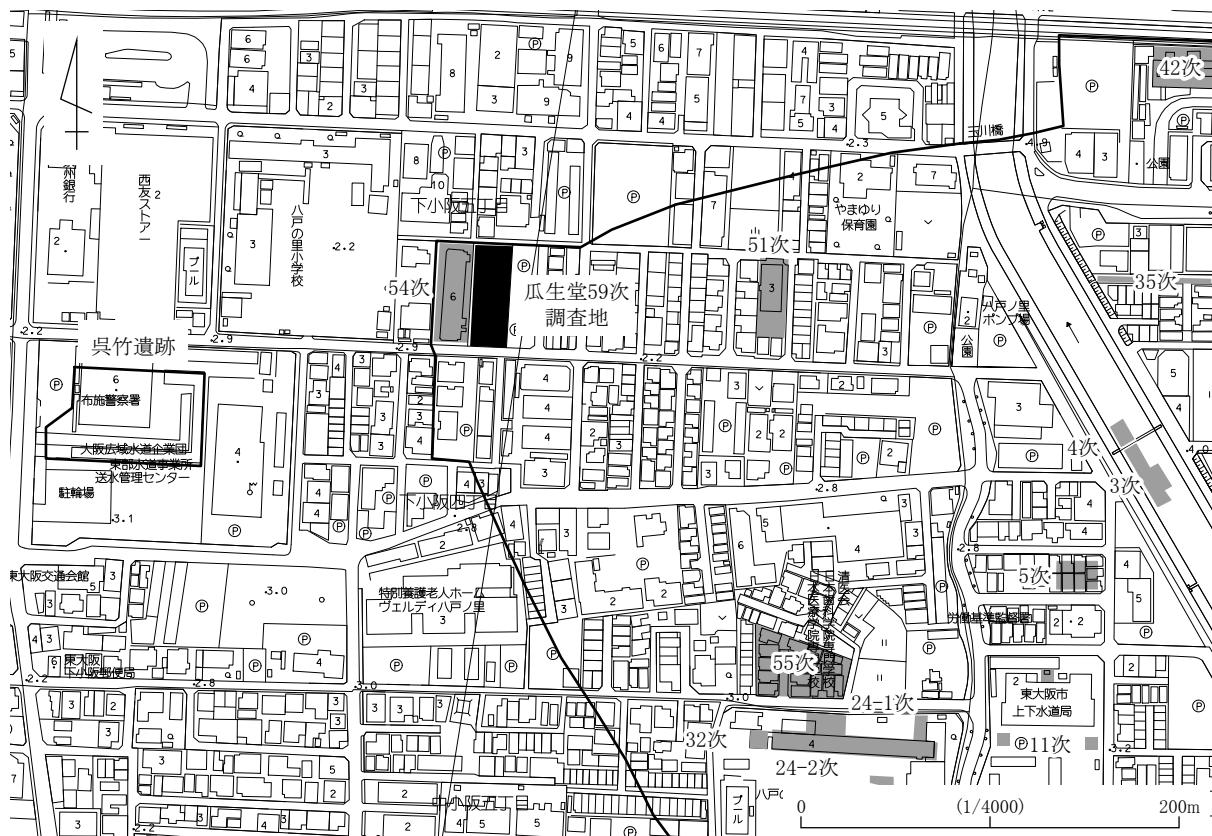
瓜生堂遺跡は、弥生時代中期の方形周溝墓群を含む拠点集落として考古学史上著名である。遺跡の発見は古く、昭和40年2月からの工業用水道管理設工事に伴い発見された。当該工事では、多量の弥生土器や青銅製の利器が採集され、広く周知されるようになった。詳細は後述する。

令和4年11月、東大阪市下小阪五丁目40番3で、共同住宅建設に伴う「埋蔵文化財発掘の届出」が美樹工業株式会社から提出された（第1図）。当該地は第54次調査地の東隣に接することから、当該工事の実施により、埋蔵文化財の損傷が懸念された。ただちに開発者と協議に入り、工事実施前に確認（試掘）調査を行うことになった。確認（試掘）調査は令和4年12月13日に実施した。当該地には調査直前まで昭和40年代後半ごろに建設された共同住宅があり、旧共同住宅の建設により埋蔵文化財が損傷されていることが予想された。調査トレンチは当初3ヶ所設定した（第3図）。

調査の結果、前記の予想どおり、No.2とNo.3については、旧建物基礎等により遺物包含層が滅失していたが、北側のNo.1では、地表下1.4mで遺物包含層が検出され、コンテナ2箱に及ぶ奈良～平安時代の土師器・須恵器が出土した。このため、No.1とNo.2の調査所見を勘案して、遺物包含層の南への広がりを把握する必要が生じた。No.1トレンチの南端から南へ延長するトレンチ、No.4を設定した。そこで開発予定地の北端から南、9.2mの地点まで遺物包含層が広がることを確認した。

上記の調査結果に基づき、文化財課と開発者で協議を重ね、遺物包含層が遺存する共同住宅の北側及びエレベータピットを調査対象として、本発掘調査を行うことで合意した。本発掘調査の調査面積は約98m<sup>2</sup>である。本発掘調査は令和5年2月2日から同年2月28日まで、実働18日間実施した。

現地調査及びその後の遺物整理、報告書作成に関する経費は、美樹工業株式会社が全額負担した。



第1図 調査地位置図

## II 位置と環境

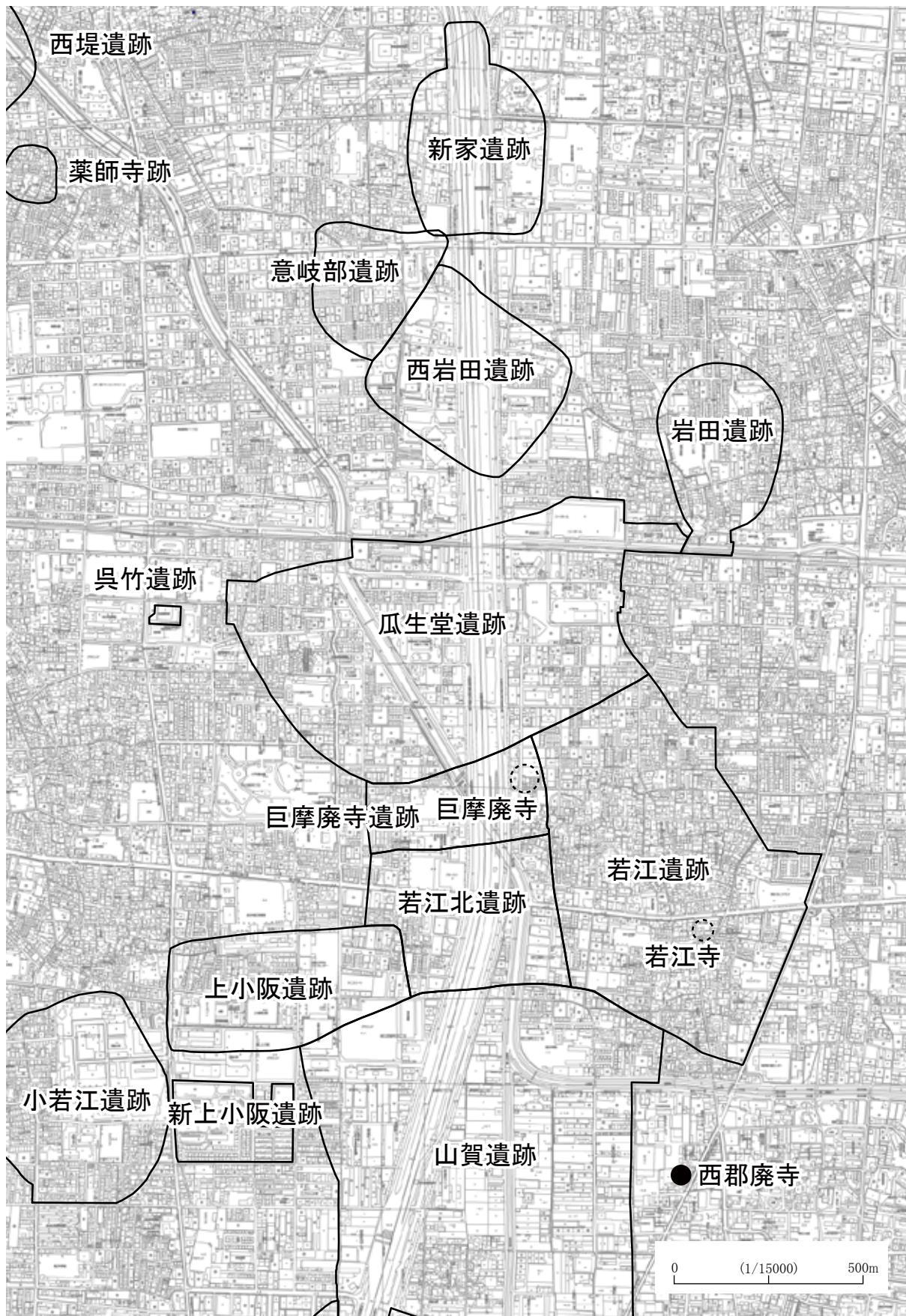
瓜生堂遺跡は、府道中央環状線と近鉄奈良線が交叉する南側にあたり、遺跡範囲は東西約1.2km、南北約0.8kmにわたる。現在の町名表示では、下小阪4～5丁目、中小阪4丁目、瓜生堂1丁目、若江西新町1～2丁目、若江北町1～2丁目が該当する。今回の調査地附近の標高は2.9mを測る。

瓜生堂遺跡は、河内平野の沖積低地に位置する。本遺跡周辺の地形条件については、松田順一郎氏の分析がある（松田順一郎 2001）。それに拠ると、完新世後半に旧大和川の分流路の河川堆積作用によって発達した流路、自然堤防と人工堤防、後背湿地などが分布する。また、旧大和川のひとつ長瀬川の流路などが広く帶状に南東—北西方に伸び、その東方には弥生時代後期後半以降に発達した若江分流路跡が所在した。本遺跡周辺はこの分流路間の低地及び流路域にあたると考えられる。

約9千年前から約5千年前、河内平野では生駒山麓付近まで海水が流入し、湾を形成していた（河内湾）が、その後、土砂が堆積し、徐々に河内湾は縮小、淡水の河内湖に変化した。弥生時代に入ると、本遺跡とその周辺で稻作に好適な後背湿地で農耕が開始され、集落が營造される。周辺では、南側の若江北、山賀の各遺跡（以下「遺跡」を省略）から集落と水田が確認されている。若江北では掘立柱建物、堅穴住居が見えるが集落は短期間で終わる。山賀では、集落の規模が大きく、遺物量も多量だが、中期になると次第に衰退する。中期になると、本遺跡は河内湖南岸の拠点集落として最盛期を迎える。複数の墓域では、遺存状態の良好な方形周溝墓、木棺墓、土壙墓などが発見されている。集落域では掘立柱建物など多数の遺構のほか、土器、土製品、木製品、石器など多彩な遺物が見られる。また、銅戈など金属製品も出土している。後期は、集落の小規模化が進行する。本遺跡をはじめ、若江、若江北、上小阪、山賀に分散して小集落が形成される。また遺物量も減少する。墓域では、方形周溝墓が巨摩廃寺と若江北で見られる。古墳時代では明確な古墳は未確認だが、中期から後期に小型低方墳が巨摩廃寺と山賀で出現する。本遺跡第24次調査で、多量の円筒埴輪等などが出土し、周辺に削平、破壊された古墳の存在が暗示される。

本遺跡を含む玉串川左岸から長瀬川右岸は、律令制下では河内国若江郡に相当する。古代豪族はその権力の表徴として古墳から氏寺の建立に注力する一方、郡衙に附属する寺院も壇越として造営に参画する。本遺跡周辺の寺院跡として、若江寺、巨摩廃寺、西郡廃寺が知られる。若江寺は7世紀前半に創建され、『尊意贈僧正傳』元慶六年（882）条に見え、『長祿記』文明十四年（1482）にも記載されることから15世紀後半まで存在が確認できる。巨摩廃寺は昭和39年（1964）の調査で東西約20m南北約14mの基壇状高まりと、礎石が3基検出されたが、築造時期は不明である。西郡廃寺も7世紀前半の造営で、寺名を負う錦織連の氏寺とされる。河内郡の河内寺廃寺と同様の軒平瓦が出土している。塔心礎が現存する。

古代集落では、本遺跡の調査で「若」銘の墨書き土器が出土し、これを若江郡衙や前記の若江寺と関連付ける見解もある。隣接する岩田で8世紀中葉から10世紀の集落跡が発見され、円面硯、帶金具（巡方）、墨書き土器などの出土が報告されている。巨摩廃寺では、曲物を三段組み合わせた井戸が検出された。今回報告する井戸SE2と同様の構造を持つ。若江郡の古代集落調査として大きな成果が新上小阪で見られた。2008年の府調査で、掘立柱建物4棟、塀1構、土坑・溝が多数、同時期の市調査でピット、土坑、溝と、横板組杭留型の井戸1基が検出された。遺物は8世紀前半から10世紀までのものが見られるが、長岡京期から平安京I期新までが主体を占める。軒平瓦や、円面硯、新羅系陶質土器、「村主」銘の墨書き土器など、一般集落跡とは異なる様相を見せる出土遺物があり、公的な施設の性格を持つ集落と捉えられている。このように本遺跡とその周辺は、若江郡の古代集落が展開する情況を遺構・遺物から追跡することが可能である。



第2図 周辺遺跡分布図

\* 松田順一郎 2001 「調査地とその周辺の地形条件」 (『上小阪遺跡東端部における弥生時代後期以後の遺構群』、財団法人東大阪市文化財協会)。なお、上記の記述にあたり、各遺跡の調査報告書を適宜参考した。

### III 瓜生堂遺跡古代集落の概要

前章で触れたように、弥生時代遺構面の上層には、古墳時代から奈良・平安時代の遺構面が広く覆っている地域が認められる。便宜上、これを「古代集落」と仮称して記述を進める。

瓜生堂遺跡の古代集落については、金村浩一氏の分類整理がある (金村 1999)。それに拠ると、〔集落Ⅰ〕遺跡中央部 (第二寝屋川右岸際周辺) - 8世紀前半～8世紀後半／9世紀前半に廃絶 [集落Ⅱ] 遺跡北東部 (近鉄奈良線若江岩田駅西方) - 8世紀後半／9世紀前半～10世紀後半 [集落Ⅲ] 遺跡西部～西端 (第二寝屋川左岸の西方) - 8世紀後半／9世紀前半～10世紀後半の3地区に集約できるとされる。集落Ⅰを中心として集落Ⅱと集落Ⅲに移動・拡散する様相について、同氏は、耕地の拡大や最適地の探索を目的として、居住地の移動が図られたものとみている。その当否を措くとしても、今回の調査地は、上記の分類で [集落Ⅲ] に該当することになる。ここでは、現在の地所で下小阪四・五丁目、中小阪五丁目にあたる地域の調査成果を見ていきたい (第1図参照)。

今回の調査地から南東に約300m離れた第24次調査では、奈良～平安時代の掘立柱建物5棟、井戸2基、焼土坑が検出された。特に9世紀前半の井戸から銅錢9枚、木製櫛が出土した。遺物包含層から土馬も発見された。西に隣接する第32次調査でも同時期の溝・ピットが発見されている。

東へ約150mの第51次調査では飛鳥～奈良時代の土坑、溝、ピット、落ち込み、古墳時代後期初頭から中葉の溝、ピット、落ち込み、古墳時代中期末から後期初頭の土坑、溝、ピット、落ち込みなどが見つかっている。なお、本遺跡ではないが、西端から約150mの地点に呉竹遺跡が所在する。平成19年に警察署の建替工事に伴い実施されたもので、古墳時代後期から飛鳥時代の総柱掘立柱建物2棟と、土坑、溝、奈良時代から平安時代の土坑、溝などが検出されている。空間的、時期的に今回の調査地と近似しており、遺跡間の関連が考えられる。

さて、平成19年に当時の遺跡の範囲最西端 (当時はほぼ遺跡外) で共同住宅の新設工事が企図された。建設予定敷地のごく南東端のみ遺跡範囲に該当していたため、建設に先立ち試掘調査を実施したところ、遺跡外の北西隅で平安時代の遺物が多量に出土したため、当該地における埋蔵文化財の詳細データを得るため、共同住宅の底地を対象として、再度調査を実施することとなった (瓜生堂遺跡第54次調査)。

調査の結果、平安時代の遺構面が良好かつ濃密に遺存していたため、開発者から文化財保護法第96条に基づく遺跡発見の届出書が提出された。平成20年1月22日、大阪府から遺跡発見通知書が送付され、第54次調査地の内外周囲は周知の瓜生堂遺跡の範囲内となった。上記の事由により、前章で記したように、今回の第59次調査地直前に存在した旧共同住宅の敷地、すなわち今回の調査地については、その建設時点で埋蔵文化財包蔵地ではなかったこととなる。

第54次調査は平成19年10月から11月にかけて実施された。南北に長いトレンチを4ヶ所設定した (第3図)。第54次調査A地区では、最も遺構が濃密に分布し、ピット24個、土坑3基、溝1条を検出した。A地区東側のD地区では、近現代の搅乱が著しいが、A地区から遺構面が連続し、ピット3個、土坑1基、溝4条を発見した。D地区南のC地区では、井戸1基を検出した。井戸は、曲物の上部に方形の枠組を設えていた。A地区南のB地区は、南への傾斜面を持ち、無遺物であった。出土遺物は土師器、須恵器があり、①平城VI期・平安京I期古の土器群、②土師器粗製壺を主体とする

10世紀前半期の土器群の2種が見られた。所属時期は、金村氏の〔集落III〕の想定期とほぼ符合すると考えられる。トレンチの幅員に制限があったが、上記①②に属する集落が、第54次調査の周辺に広がることが判明した。このことにより、これまで不明であった近鉄八戸ノ里駅周辺に古代集落が存在することが確認され、大きな調査成果を得た。

\*金村浩一 1999「瓜生堂遺跡の古代集落について」『瓜生堂遺跡第45次発掘調査概要報告』東大阪市文化財協会)

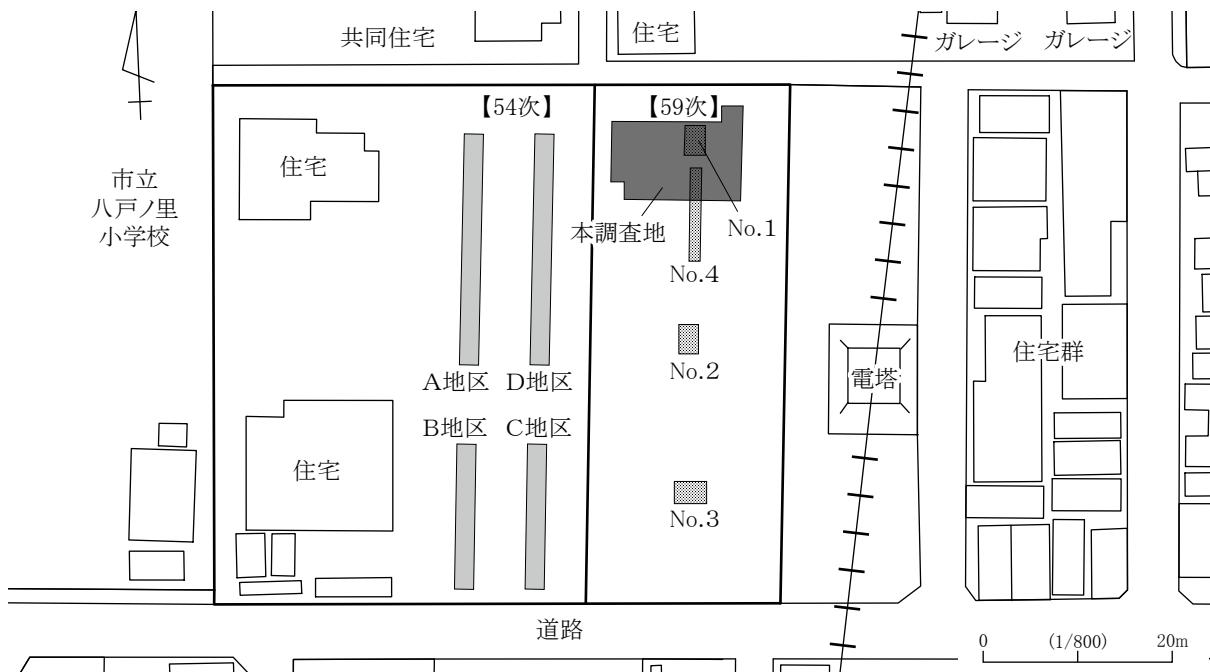
#### IV 調査の概要

##### 1) 調査の方法と地区割 (第3・4図)

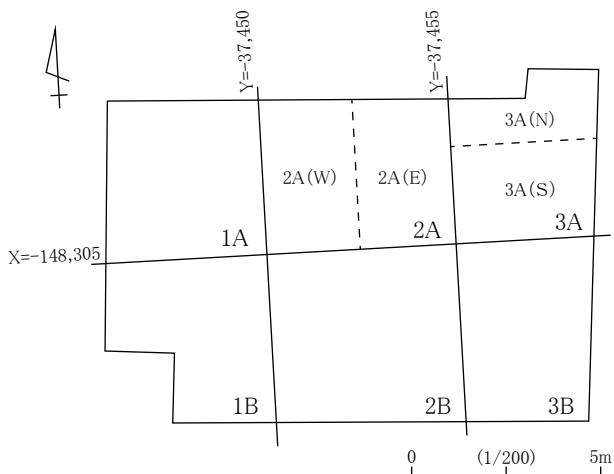
確認(試掘)調査の結果に基づき、本発掘調査のトレンチ(以下「トレンチ」)を設定した。建設予定地のうち、北側の杭基礎、エレベーターピットなど、当該工事の実施により確認調査で発見された埋蔵文化財を損壊するおそれのある箇所、また北端から確認調査No.4で確認した遺物包含層と旧共同住宅による既破壊箇所の境界まで、トレンチを設定した。トレンチは、東西13m、南北7.5mで、約98m<sup>2</sup>となる(第3図)。機械掘削の段階でトレンチの北東端に遺物の密集が見られた反面、南西端では既破壊箇所があることから、北東端を凸形に拡張、南西端を凹形に縮小したが、調査面積には変更ない。

確認調査で第3層までは遺物が出土しなかったため、調査は、盛土から第3層まで、現地表下約1.5mを重機で除去した。第4層以下は人力で掘削した。第4層は後に詳報するように、奈良～平安時代の多量の遺物を包含していたため、鋤取りによる掘削ののち、排土として場外へ搬出する前に、片手草削り等を用いて、慎重に遺物の確認作業を進め、遺物の検出漏れがないよう心がけた。トレンチの北東側では遺物が密集していたため、その箇所ごとに、写真撮影を行い、遺物の出土状況を記録した。

第4層の人力掘削後、第5層ないし第6層を検出し、その上面の遺構面精査を図った。検出した遺構の概要については、以下に記す通りである。検出した遺構については検出状況、掘削完了後の二段階で全景、近景の写真撮影を行い、のちに平面実測図(以下「平面図」)を作成した。平面図は縮尺



第3図 第54・59次の調査トレンチと周辺の状況



第4図 第59次調査地地区割図

終了後、排土で埋め戻しを行い、全工程の現地調査を終了した。

遺物の取り上げ、検出遺構の平面図作成等のため、国家座標に基づく基準点測量を行い、のち現地の基準点をもとに地区メッシュ杭の打設と地区割を実施した（第4図）。国家座標に基づく地区メッシュ杭は東西、南北ともに5mの格子区画とした。南北X軸は北から、-148,300、-148,305、-148,310となる。東西Y軸は西から、-37,455、-37,450、-37,445、-37,440となった。これを便宜上、X軸を北からA、B、Y軸を西から1、2、3、と振り、南東の交点を地区名とした。

その結果、トレンチは、1A、1B、2A、2B、3A、3Bの6地区に区分できた。2A区、3A区については、第4層内の出土遺物が多量であったため、2A区は南側には搅乱が広がっていたため東西で2分割しそれぞれ2A (W)、2A (E)とした。3A区は3A (N)、3A (S)に分割した。

## 2) 層位（第5図、図版7～8）

トレンチの現地表はT.P. 2.8～2.9mである。堆積状況は、現代の盛土層に近年の造作による乱れがあるが、それ以下の層準では、ほぼ水平を保っていた。確認した層位は以下のとおりである。なお、「A地点」他とあるのは、第5図の壁面最上部の記号を指している。

盛土層 現代の盛土層。旧共同住宅の解体による埋戻し土を含む。層厚50～60cmを測る。

第1層 緑灰色（5G5/1）シルト質細粒砂。旧耕土層である。層厚15cmを測る。A地点とB地点付近のみ、この層と第2層との間に細粒砂とシルトの混合土が介在していた。これを第1B層とした。

第1B層 にぶい黄褐色（10YR4/3）細粒砂〈マンガン粒含む〉、緑灰色（5G5/1）シルト質細粒砂、にぶい黄褐色（10YR5/3）中礫混じりシルトの混合土。層厚10cmを測る。

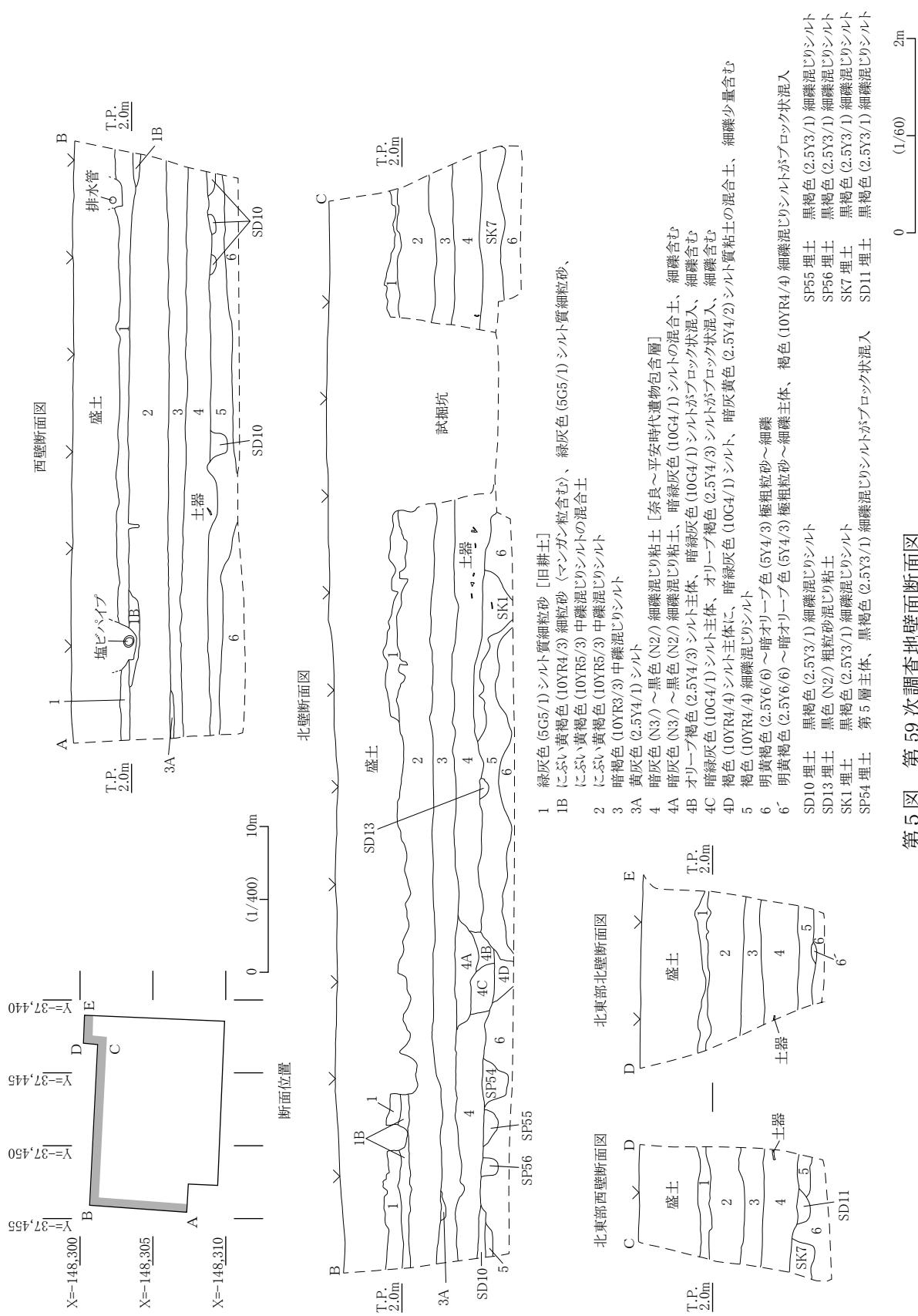
第2層 にぶい黄褐色（10YR5/3）中礫混じりシルト。層厚35cm～40cmを測る。トレンチ西側では厚く、東に行くに連れて層厚を減ずる。無遺物。

第3層 暗褐色（10YR3/3）中礫混じりシルト。層厚15cm～25cm。第2層と逆に中央から東端にかけて層厚は厚くなる。無遺物。第54次調査の第2層に対応すると見られ、中世期以降に堆積した層と考えられる。B地点付近では、この層上面にシルト層がレンズ状に堆積していた。これを第3A層とした。

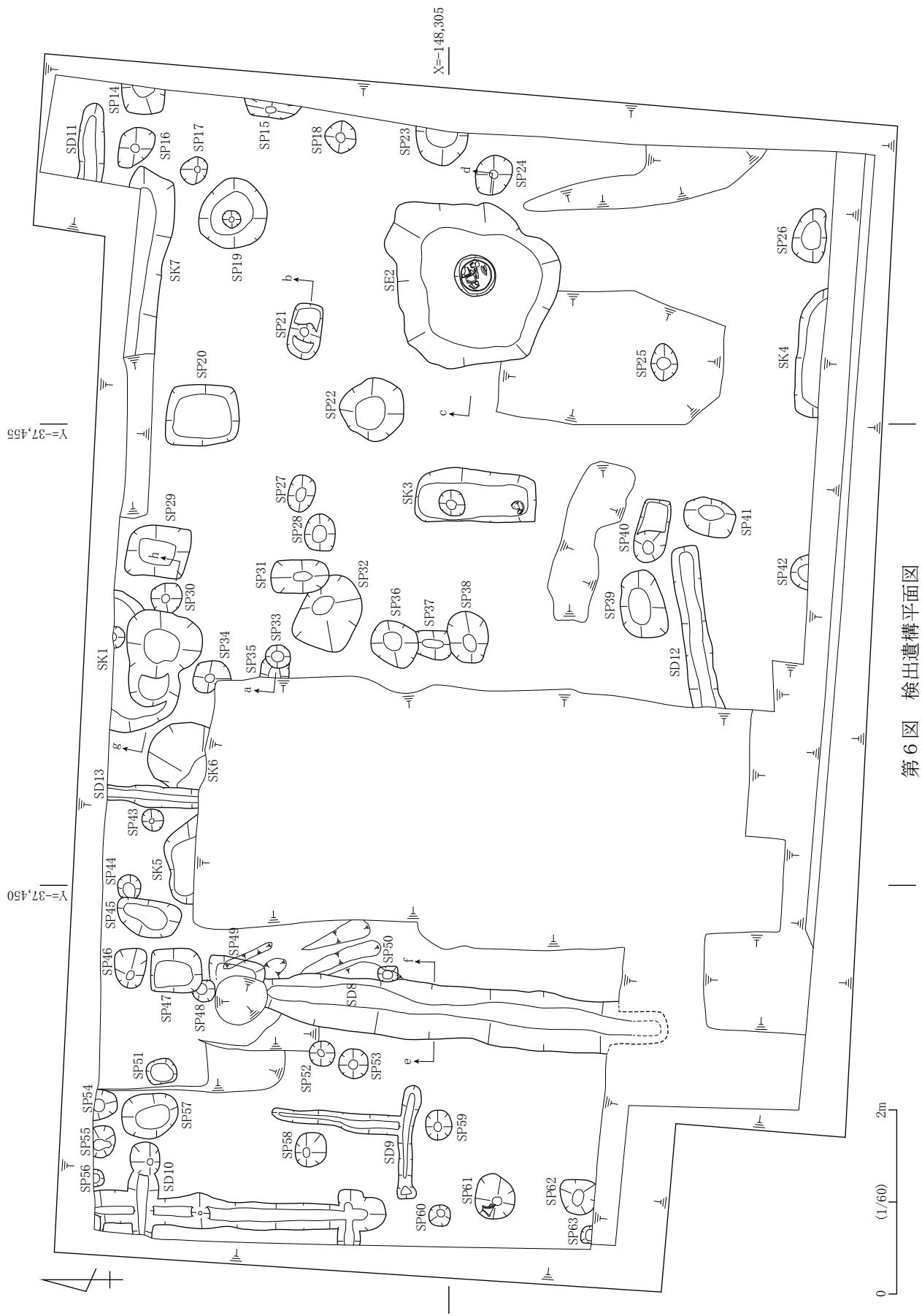
第3A層 黄灰色（2.5Y4/1）シルト。層厚は最大5cmを測る。

1/20を基本とし、適宜1/10の縮尺を用いた。平面図作成後、遺構と遺構面について標高レベルを測定した。

遺構面の調査完了後、トレンチ西壁断面と同北壁断面について、断面際にサブトレンチを設け、遺物出土の確認を行った。また両断面を精査し、層位の観察を進めた。断面の分層後、その状況を撮影し縮尺1/20の実測図を作成した。調査の最終段階で井戸を検出したため、その平面と立断ち割りを掘り下げ、平面、断側面を縮尺1/10で実測し記録した。井戸の調査中、段階ごとに適宜写真撮影した。以上の作業



第5図 第59次調査地壁面断面図



第6図 検出遺構平面図

第4層 暗灰色（N3/）～黒色（N2/）細礫混じり粘土。奈良～平安時代の遺物包含層。3A区を中心にして層厚25cm～40cm。3A区中心に遺物が密集して出土した（図版1～2）。トレント西側から東側にかけて層厚を増し、D-E間では最大の層厚となる。また本層の色調も西側では暗灰色だが、SK1付近から東端にかけて黒色化していた。本層の上面レベルはA地点でT.P.1.47m、B地点T.P.1.42m、C地点T.P.1.42m、D地点T.P.1.44m、E地点T.P.1.5mを測り、ほぼフラットである。なお、B地点から約3m東の箇所で、この層を切り込む土坑状の堆積が見られた。4層に区分され、各々第4A層、第4B層、第4C層、第4D層とした。

第4A層 暗灰色（N3/）～黒色（N2/）細礫混じり粘土と暗緑灰色（10G4/1）シルトの混合土。細礫を含む。層厚は最大25cmを測る。

第4B層 オリーブ褐色（2.5Y4/3）シルトを主体に、暗緑灰色（10G4/1）シルトがブロック状に混入する層。細礫を含む。層厚は最大16cmを測る。

第4C層 暗緑灰色（10G4/1）シルトを主体に、オリーブ褐色（2.5Y4/3）シルトがブロック状に混入する層。細礫を含む。層厚は最大23cmを測る。

第4D層 褐色（10YR4/4）シルトを主体に、暗緑灰色（10G4/1）シルト、暗灰黄色（2.5Y4/2）シルト質粘土が混合する層。細礫を少量含む。層厚は最大20cmを測る。

第4A層～第4D層には、共通して還元化した暗緑灰色シルトが認められる。極めて耕作土の様相を見せており、これらを比較的新しい時期の耕作関連の堆積土とすれば、その上層の第2～3層の堆積時期は近世以降に捉えられる可能性がある。

第5層 褐色（10YR4/4）細礫混じりシルト。層厚は10～30cmを測る。上面は奈良～平安時代の遺構面を形成する。遺構營造段階の整地層と見られる。無遺物。

第6層 明黄褐色（2.5Y6/6）～暗オリーブ色（5Y4/3）極粗粒砂～細礫。層厚はC-D間で最大40cmを測る。色調は地点により変化する。第5層と同様、上面は奈良～平安時代の遺構面を形成する。付近の調査例から古墳時代初頭に堆積した洪水による堆積層と見られる。無遺物。

### 3) 検出遺構（遺構平面の全体図は第6図）

今回の調査では、第5層～第6層上面で、土坑6基、井戸1基、溝6条、ピット50個を検出した。ピットの検討により、掘立柱建物1棟が復元できた。遺構番号は、遺構面精査の検出時に、土坑（SK）、溝（SD）、ピット（SP）の順に数字を振り与えた。したがって、SK1とSD1など、同一の数字を持つ遺構とならないよう注意した。井戸は、その検出時に土坑と認識していたため、当初SK2としたが、のちに井戸と判明したため、数字はそのままにSE2とした。したがって、SK2は欠番となっている。

次に、遺構面のレベルを確認しておく。X=-148,305のAライン（第4図）[東西]では、遺構面は西から東へT.P.1.155m、T.P.1.125m、T.P.1.24m、T.P.1.19m、T.P.1.195mであり、実測約13mの延長で11.5cmの比高を測る。トレント中央がやや高く、中央から西方向と東方向に傾斜していることがわかる。Y=-37,445の2ライン（第4図）[南北]は、T.P.1.15m、T.P.1.17m、T.P.1.19m、T.P.1.23m、T.P.1.265mとなり、実測8.5mの延長で11.5cmの比高を測る。南端が高く、北～傾斜する。

#### ①掘立柱建物・ピット（第1表、第7・8図）

まず、今回検出したピットの概況について説明しておきたい。ピットの平面形態、規模、埋土、出

土遺物については、第1表に示した。

ピットの埋土については、

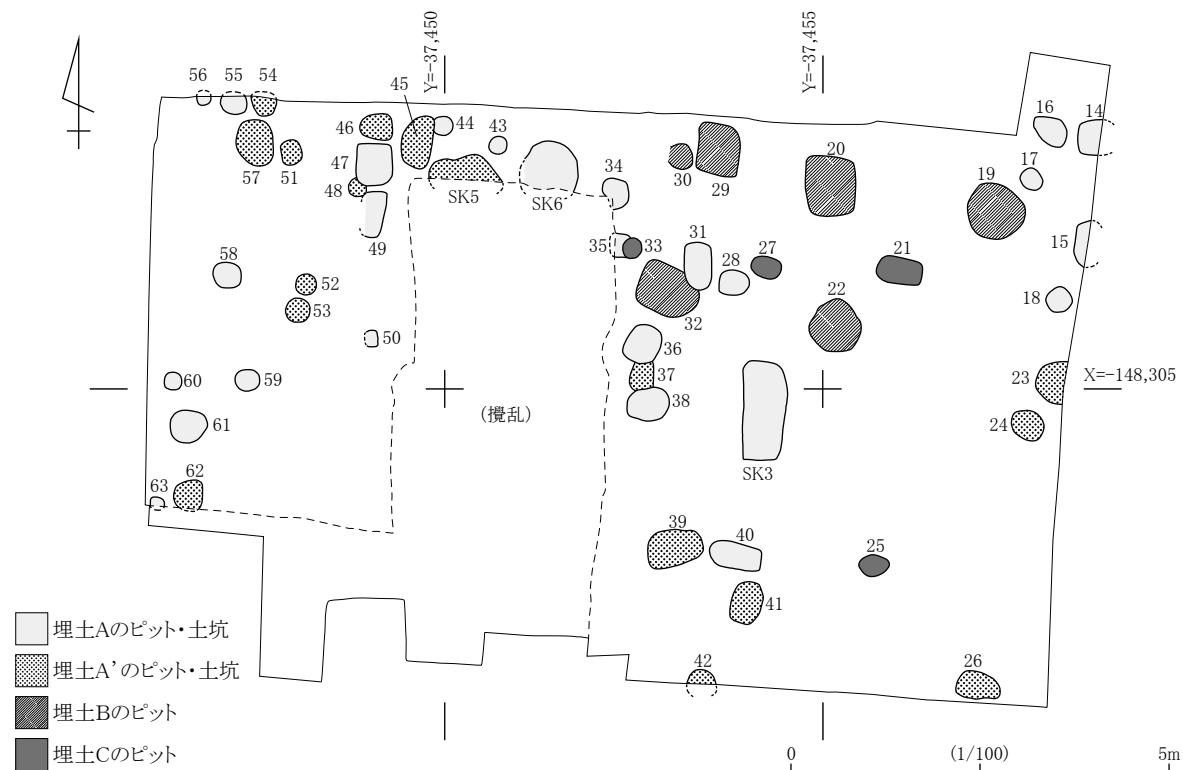
- A 黒褐色 (2.5Y3/1) 細礫混じりシルトを主体に、褐色 (10YR4/4) 細礫がブロック状に混入。
- A' 褐色 (10YR4/4) 細礫混じりシルトを主体に、黒褐色 (2.5Y3/1) 細礫混じりシルトがブロック状に混入。
- B 灰色 (5Y4/1) 細礫混じり粘土を主体に、褐色 (10YR4/4) 細礫がブロック状に混入。
- C 黒色 (N2/) 粗粒砂混じり粘土。

の4種に区分できた。この4種の分布状況を検討するため、第7図を作成した。埋土Aと埋土A'は埋土の主体になる土壤が逆になる相違のみで、一つのグループに括ることができる。それを踏まえて、ピットの切り合い関係を見ていくと、新旧関係は、埋土Bのピットが古く、次いで埋土A・A'、埋土Cの3時期に区分できると考えられる。図式化すると次のようになろう。

#### 《埋土B < 埋土A・A' < 埋土C》

また、埋土の相違とピットの平面形態・規模は関連を持っている。すなわち、埋土Bのピット [SP20ほか] は方形を呈するものが多く、規模も長径で 70 ~ 80 cm を測り、大きい。いっぽう埋土Cのピット [SP27ほか] は円形ないし楕円形で、規模も小ぶりである。埋土A・A'のピットは3種の中でも数が多いが、形態、規模ともまとまりは見られない。トレンチ中央西寄りに、南北約 6 m 東西約 3 m の攪乱部があり、付近の状況から、ここにもピットが広がっていたことが推定できる。今回検出のピットと併せて、掘立柱建物が複数棟存立していたと見られるが、現状では審らかにできない。

ここで、埋土Bのピット群について見ておく。円形小ピットの SP30 を除く SP19 - SP20 - SP29 - SP32 - SP22 の5個のピットは前記のように長径 70 ~ 80 cm を測り、円形ないし方形を呈する。今回のトレンチでは、古相に属する。SP29 と SP20 がやや近接、逆に SP32 と SP22 が遠隔となっており、



第7図 ピット・土坑 (SK1・4・7を除く) の埋土の分布状況

第1表 ピット一覧表

遺構番号	平面形態	規模(cm)			埋土	出土遺物
		長径	短径	深さ		
SP14	隅丸方形孔	47	29 +	17	A	師
SP15	隅丸方形孔	62	17 +	14	A	-
SP16	楕円形	35	52	35	A	-
SP17	円形	30	27	13	A	-
SP18	円形	35	34	8	A	師・須・塩
SP19	円形	77	71	14	B	師・塩
SP20	方形	80	67	32	B	師・須・塩・把
SP21	長楕円形	61	35	34	C	師(16)・須・塩
SP22	円形	70	70	17	B	師・須
SP23	円形孔	59	37 +	13	A'	師
SP24	円形	45	40	7	A'	-
SP25	楕円形	40	30	13	C	-
SP26	楕円形	59	37	9	A'	師・羽
SP27	楕円形	40	28	14	C	師
SP28	円形	40	35	16	A	師
SP29	方形	67	55	40	B	師・須
SP30	円形孔	34	31 +	11	B	師・須
SP31	長楕円形	63	36	11	A	師・塩
SP32	隅丸方形孔	84	65	31	B	師・須
SP33	円形	28	25	18	C	師・須
SP34	円形孔	42	29 +	12	A	-
SP35	円形孔	32	20 +	14	A	師
SP36	隅丸方形	52	44	16	A	師
SP37	楕円形孔	37 +	32	9	A'	-
SP38	楕円形	55	44	16	A	師・須
SP39	楕円形	74	50	13	A'	師・須・羽
SP40	長楕円形	69	35	51	A	-
SP41	楕円形	56	40	17	A'	-
SP42	円形孔	39	19 +	6	A'	師
SP43	円形	24	24	7	A	-
SP44	円形孔	25 +	25	5	A	師
SP45	長楕円形	70	41	6	A'	師
SP46	楕円形	42	35	29	A'	師・須
SP47	隅丸方形	55	48	18	A	師・須
SP48	円形孔	25 +	24	5	A'	師・須
SP49	方形孔	63	21 +	12	A	師
SP50	円形	23	18	10	A	師
SP51	円形	35	30	6	A'	羽
SP52	円形	28	27	17	A'	師
SP53	円形	33	32	16	A'	師・須
SP54	円形孔	35	25 +	9	A'	師・須
SP55	円形孔	35	25 +	13	A	須・塩
SP56	円形孔	20	13 +	3	A	-
SP57	楕円形	61	50	11	A'	師・須
SP58	円形	37	34	23	A	師
SP59	円形	32	30	17	A	師
SP60	円形	23	23	22	A	師・須
SP61	円形	50	44	9	A	師・須(17)・羽
SP62	円形孔	39 +	38	17	A'	師・須
SP63	円形孔	19	12 +	17	A	-

## 【凡例】

[平面形] カは当該のピットが調査地外へ延びるため、平面形を類推したもの。

[規模] プラス(+)はピットが調査地外に延び、その数値以上を測ることを示す。

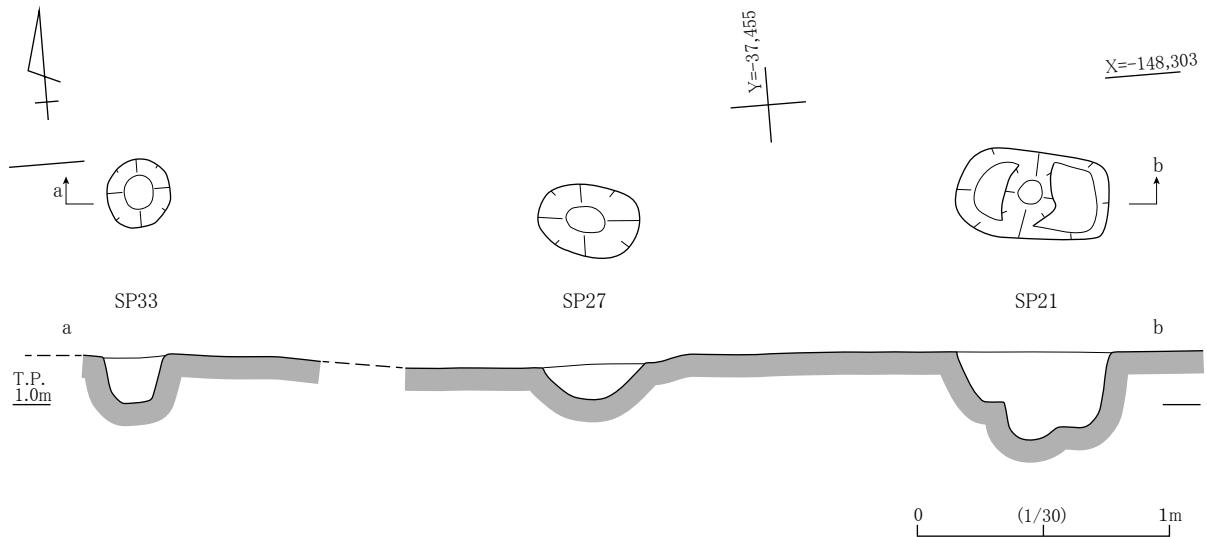
[埋土] A: 黒褐色(2.5Y3/1)細礫混じりシルト。第5層の細礫層ブロック混入。

A': 第5層主体、黒褐色(2.5Y3/1)細礫混じりシルトのブロック混入。

B: 灰色(5Y4/1)細礫混じり粘土。第5層の細礫層ブロック混入。

C: 黒色(N2/)粗砂混じり粘土。

[出土遺物] 師: 土師器、須: 須恵器、塩: 製塩土器、土師器(羽釜): 羽、土師器(把手): 把、(): 内は出土遺物番号



第8図 SP33 – 27 – 21 の柱通り実測図

柱通りを復元することができないが、規模の点から、今回のトレンチで主になる掘立柱建物の存在が示唆される。ピットの分布を見ると、トレンチの中央北側のやや東側、地区では2A区、3A区にピットが集中し、2B区、3B区ではピットが少なく、小型である。遺構面の平面精査、およびトレンチ壁面の断面観察で、トレンチ北端から約5m南で、遺構面の形成に伴う第5層の層厚が減じ、第6層の砂礫層が露出している。ピットの散在と関連すると見られる。また、ピットが2A区、3A区に集中することは、ピットをはじめとする遺構がトレンチ外の北側に続くことを示すと考えられよう。

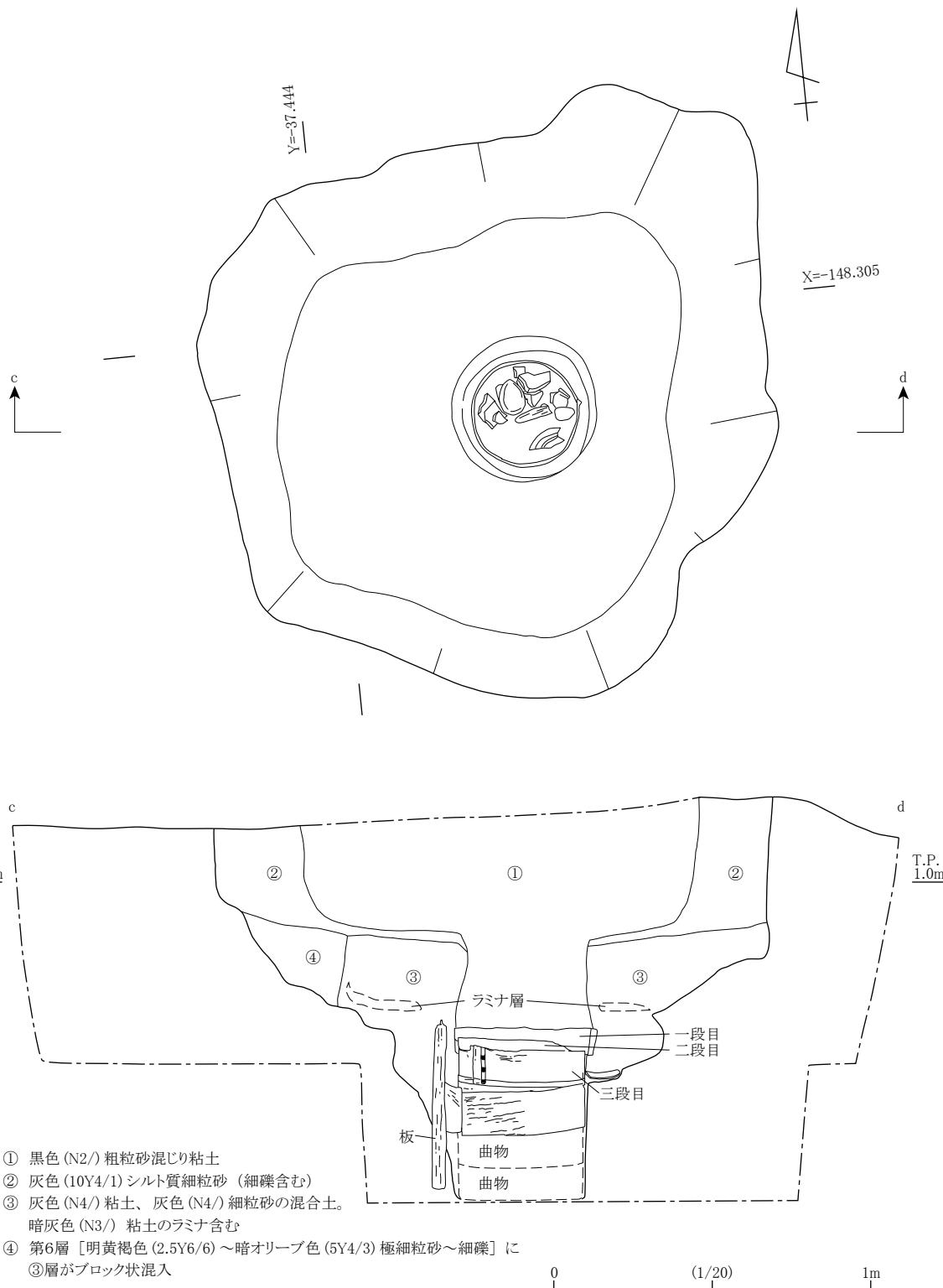
#### 掘立柱建物1（第6図、第7図、第8図）

2A区から3A区にかけて検出。棟の方向は不明。埋土Cを持つSP21 – SP27 – SP33で構成される。SP21には、径20cmの柱痕跡が認められた。SP21は長楕円形で他の2つに比べ大きいこと、ピットの底面について、SP33がT.P. 1.005m、SP27がT.P. 1.03mであるのに対し、SP21はT.P. 0.855mと15~17.5cm深いことから、SP21が建物の隅柱と見られる。柱間は1.8m（6尺）を測る。埋土Cを持つピットが1A区に見られず、SP33が小型であることから、搅乱部で方形のプランをとると考えた。その場合、柱間は東西に3間となる。SP21の南約5mに同じ埋土Cを持つSP25があるが、その間にピットが存在せず隔絶していること、また距離も長いことから、SP21から矩形に南に折り返す推定は不可と考える。またSP21には遺物が中量見られ、9世紀初頭の土師器皿が出土した。

#### ②井戸（第9図、図版6~7）

SE2は3A区から3B区にかけて検出。積み上げ式曲物組型に属する（（鐘方2003）の分類に拠る。なお、井戸の構造、各部名称等は同書に準拠して記述する）。SE2の掘方平面は北東側に張り出しを持つ不定な方形を呈する。東西1.8m南北1.9m、検出面からの深さ1.26mを測る。掘方底面と集水施設（曲物最下端）底面はほぼ一致し、井戸枠の規模に合わせて掘方を穿っていたことがわかる。井戸枠内堆積土は①層で、黒色（N2/）粗粒砂混じり粘土である。当初土坑と認識しており、掘り下げ中に遺構の壁面が垂直から袋状気味に落ちるため、再度精査を行った結果、土坑より一回り大きな井戸であることが判明した。土坑底面の精査とその観察で、土坑の埋土と井戸枠堆積土の相違が認識できず同一層としたが、井戸枠機能面（第9図の③層上面付近）の上面で分層できる可能性がある。その場合、①層の上層は井戸廃絶時の埋土に相当する。検出面から約0.65mで井戸枠の曲物を6段分確認した。

曲物を検出時から順に1段目、2段目…と仮称すると、3段目のすぐ外側に一回り大きな2段目、



第9図 SE2 実測図

さらにその上部に一回り大きな1段目を据えている(図版7-2)。曲物の留め具の位置を工夫、入れ子状に細工して、取水口の確保と井戸枠壁面の防護について効果を上げていることが知られる。4段目から6段目については直立させて装着する。曲物1段目の計は外法で径44cm、6段目は外法で径38cmを測る。現状では曲物は6段しか遺存していなかったが、③層上面まで井戸枠が直立するため、井戸構築時の段階では、さらに上部まで曲物を装着していたことが推定できる。6段目下部に埋納遺物と長径5cmから12cm大の円礫が30個出土した。なお、曲物に接してすぐ西側に直立した縦板が遺存していた。先端が尖り、長さ54cmほどが露出していた、鐘方正樹氏が説く、井戸埋め戻し時の息抜きの板組部材の可能性がある(鐘方2003、P168)。井戸枠①層からは、井戸枠①層からは、土師器、須恵器、黒色土器、製塙土器が出土した。

掘方は3層に区分できた。②層は灰色(10Y4/1)シルト質細粒砂、③層は灰色(N4/)粘土、灰色(N4/)細粒砂の混合土で暗灰色(N3/)粘土のラミナを含む。④層は第6層[明黄褐色(2.5Y6/6)～暗オリーブ色(5Y4/3)極細粒砂～細礫]に③層の灰色(N4/)粘土と灰色(N4/)細粒砂がブロック状に混入する層であった。②～④の各層から、土師器、須恵器、製塙土器が出土した。出土遺物の年代観から、SE2は、8世紀前半頃に構築され、9世紀中頃に廃絶したものと見られる。

### ③土坑

土坑は6基検出した。一部のみの検出に留まるものが多いが、遺構面精査の段階で最大長が1mを超えるものを土坑とした。

SK1(第10図)は、2A区で検出。平面は不定な円形を呈するものと見られる。断面形は底面が平坦で、緩やかなすり鉢状を呈する。西肩から緩く三段に傾斜する。現存長で東西1.52m南北0.97m最大深0.36mを測る。埋土は、黒褐色(2.5Y3/1)細礫混じりシルトで、第5層の褐色(10YR4/4)細礫が混入する層である。土師器、須恵器が出土した。

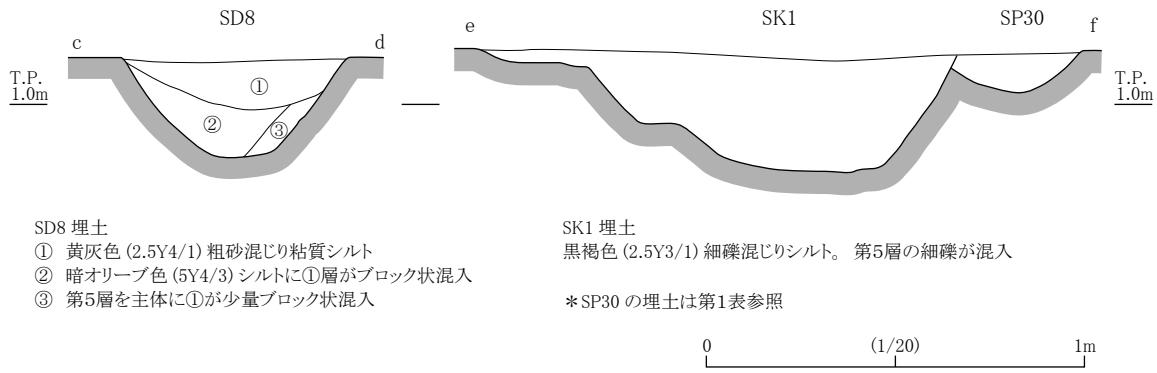
SK3は、2A～2B区で検出。平面は東西に長く、隅丸方形をとる。断面形は逆台形を呈する。長径1.3m短径0.57m深さ0.52mを測る。埋土は、黒褐色(2.5Y3/1)細礫混じりシルトを主体に、褐色(10YR4/4)細礫がブロック状に混入する層である。中央北寄りで径27cmの正円形のピット状落ち込みがある。土坑南端で土師器皿、須恵器が出土した。

SK4は、3B区で検出。一部の検出で全形は不明だが、隅丸方形と推定される。断面形は浅い皿形か。現存長で東西1.42m南北0.27m深さ0.1mを測る。埋土は、黒褐色(2.5Y3/1)細礫混じりシルトを主体に、褐色(10YR4/4)細礫がブロック状に混入する層である。土師器、須恵器が出土した。

SK5は、1A～2A区で一部のみ検出。平面は円形か。断面形は不定な皿形を呈する。南肩は搅乱により切られる。現存長で東西1.04m南北0.34m深さ0.33mを測る。埋土は、褐色(10YR4/4)細礫混じりシルトを主体に、黒褐色(2.5Y3/1)細礫混じりシルトがブロック状に混入する層である。土師器皿、須恵器が出土した。

SK6は、2A区で検出。平面は円形を呈すると見られる。断面形はすり鉢状か。土坑の西肩をSD13に、南肩を搅乱に切られる。現存長で東西0.72m南北0.63m深さ0.33mを測る。埋土は、黒褐色(2.5Y3/1)細礫混じりシルトを主体に、褐色(10YR4/4)細礫がブロック状に混入する層である。土師器皿、須恵器、製塙土器が出土した。なお、SK6の平面規模はピット状だが、東側の傾斜が大きいため、土坑に含めた。

SK7は、3A区で検出。全形は不明で溝の可能性がある。断面形は浅い皿形か。現存長で東西2.07m南北0.5m深さ0.09mを測る。埋土は、黒褐色(2.5Y3/1)細礫混じりシルトで、褐色(10YR4/4)細礫が混入する層である。土師器、須恵器、製塙土器が出土した。



第 10 図 SD8・SK1・SP30 断面図

#### ④溝

溝は 6 条検出した。

SD8 (第 10 図) は、1A～1B 区で検出。南北溝である。溝断面は蒲鉾形を呈する。溝北端は窄まっているが中央から南側にかけて幅 65 cm を測る。最大深は 25 cm である。溝底面のレベル差はほぼなく、滯水状態にあったと見られる。埋土は 3 層に区分され、①層は黄灰色 (2.5Y4/1) 粗粒砂混じり粘土質シルト、②層は暗オリーブ色 (5Y4/3) シルトに①層がブロック状に混入する層、③層が褐色 (10YR4/4) 細礫混じりシルトを主体に①層が少量ブロック状に混入する層であった。土質土色から SD8 は溝開削後、ほどなく③層が堆積し、その後②→①の順に堆積したことが知られる。位置関係からの推定だが、溝幅の規模からみて、建物の区画溝の性格を有した可能性がある。土師器、須恵器が多く出土した。

SD9 は、1A 区で検出。平面は L 字状を呈する。溝断面は浅い蒲鉾形。南北溝部分の幅は 13～21 cm、深さ 7 cm、東西溝部分の幅は 16～20 cm、深さ 14 cm を測る。溝底面のレベルは南北溝より東西溝が深く、南北間では北から南へ流下している。埋土は、黒褐色 (2.5Y3/1) 細礫混じりシルトを主体に、褐色 (10YR4/4) 細礫がブロック状に混入する層である。土師器、須恵器が出土した。

SD10 は、1A 区の西端で検出した。十字状を呈する溝状遺構で、南北溝に対して 2 箇所ないし 3 箇所東西方向に短く交叉する。溝断面は蒲鉾形を呈する。南北溝部分の最大幅 38 cm、深さ 12 cm を測る。溝の北端から南端まで底面のレベル差はほぼなく、また溝の形状を併せて考えると、SD10 は排水溝ではない。南北溝の内部にピット状の凹みが 2 箇所遺存する。北の凹みと南のそれとは芯々で 1.7 m 隔たる。SD10 は布掘り掘方 (奈文研 2003、P50) の可能性があるが凹みの深度が浅く審らかではない。埋土は、黒褐色 (2.5Y3/1) 細礫混じりシルトを主体に、褐色 (10YR4/4) 細礫がブロック状に混入する。土師器、須恵器、製塩土器が出土した。

SD11 は、3A 区の凸部で検出。小溝である。溝断面は U 字形を呈する。幅 29 cm、深さ 27 cm を測る。平面規模に比して溝深度は深い。底面レベル差はなく、滯水状態である。埋土は、黒褐色 (2.5Y3/1) 細礫混じりシルトを主体に、褐色 (10YR4/4) 細礫がブロック状に混入する層である。土師器、須恵器が微量出土した。

SD12 は、2B 区で検出。溝断面は蒲鉾形を呈する。幅 29 cm、深さ 12 cm を測る。溝底面のレベル差から、溝の東端から西へ流下する。埋土は、褐色 (10YR4/4) 細礫混じりシルトを主体に、黒褐色 (2.5Y3/1) 細礫混じりシルトがブロック状に混入する層である。土師器、須恵器が微量出土した。

SD13 は、2A 区で検出。小溝である。溝断面は蒲鉾形を呈する。幅 25 cm、深さ 5 cm を測る。SK6 と切り合う。底面レベル差はない。埋土は、褐色 (10YR4/4) 細礫混じりシルトを主体に、黒褐色 (2.5Y3/1) 細礫混じりシルトがブロック状に混入する層である。土師器、須恵器が微量出土した。

## V 出土遺物

奈良時代～平安時代の遺物が遺構および遺物包含層から出土した。

### 1) SE2 出土遺物 (第 11 図、図版 9-1・10-1)

出土したものには土師器、須恵器、黒色土器、土錐、製塩土器がある。

1、4、5、7、11～13 は土師器である。1 は皿である。体部は緩く立ち上がり、口縁端部を丸く収める。内面に暗文、底部外面に線刻文様を施す。ナデにより口縁部外面から内面にかけて調整をし、底部外面にはユビオサエを残す。8世紀前半。4 は長胴の羽釜である。口縁部外面はナデ、体部内外面には縦方向のハケ調整をする。鍔部分は貼付時にナデを行う。8世紀。5 は把手である。内面にはススが付着する。内外両面ナデ調整が施される。8世紀中頃。7 は壺である。口縁は外反し、端部は面をもつ。内面にはススが付着する。ナデにより口縁部外面から内面にかけて調整を行い、口縁端部外面はケズリが施される。体部外面には縦方向のハケを施す。頸部内面には横方向にケズリが行われている。8世紀前半。11 は壺である。体部が緩やかに立ち上がり、口縁端部を丸く収める。ナデにより口縁部外面から内面にかけて調整をする。外面はユビオサエを残しのちにナデをする。8世紀中頃。12、13 は甕である。ともに、体部の張りが小さく、口縁が強く外反する。12 は口縁内面に沈線が施される。外面ハケ調整され、ススが付着している。内面はナデ調整する。8世紀中頃。13 は内外面にススが付着している。ナデ調整やハケ調整する。8世紀後半。

3、6、8、9 は須恵器である。3 は壺の底部である。貼付高台。内外面はロクロナデ調整し、底はヘラオコシする。9世紀前半。平城宮VI。6、8 は壺蓋である。6 は頭頂部のみで、内外面ロクロナデ調整され、ツマミは貼付時にナデが施される。8世紀後半。8 は内面に墨痕が残っているため、転用硯と考えられる。8世紀後半。9 は器種不明の墨書土器である。「乙」か。

10 は黒色土器 A 類の椀である。体部が緩やかに立ち上がり、口縁端部を丸く収める。内面に放射状の暗文が施され、外面はロクロ成形の後ケズリ調整をする。9世紀中頃。畿内系 II 類。

2 は土錐である。全面ナデ調整される。

14 は写真のみの報告とする。モモの種子である。

図化できなかった遺物として製塩土器が多数出土している。

### 2) その他遺構出土遺物 (表 1、第 12 図、図版 10-2)

SK3 出土したものには土師器、須恵器がある。15 は土師器の壺である。体部が内湾して立ち上がり、口縁がわずかに外反する。口縁端部を丸く収める。内面にはナデの後、暗文を施す。底部外面はユビオサエ後、ケズリ調整する。8世紀中頃。平城宮III。

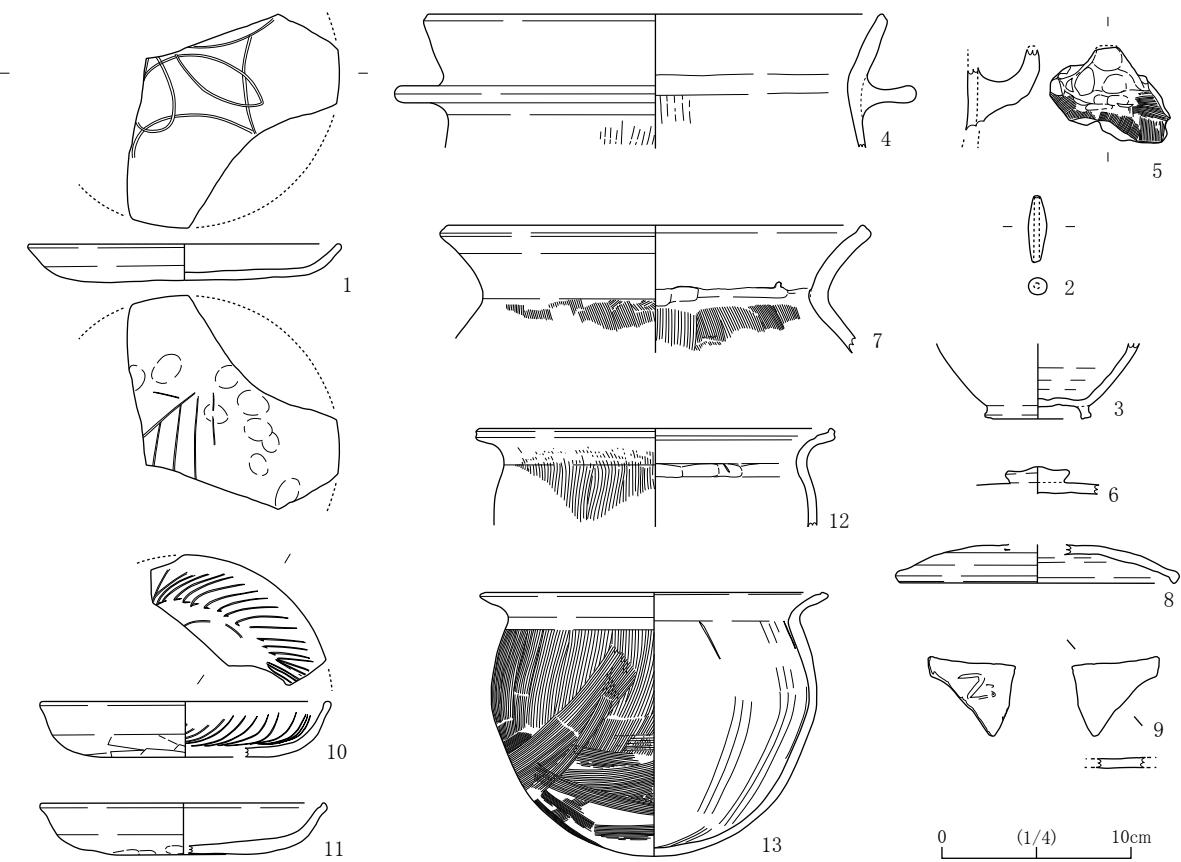
SP21 出土したものには土師器、須恵器、製塩土器がある。16 は土師器の皿と思われる。摩滅が激しく図化できなかったため、写真のみの報告とする。

SP61 出土したものには土師器、須恵器がある。17 は須恵器の甕である。体部の張りが強く、口縁が大きく外反する。口縁端部は丸く収める。口縁部外面はロクロナデ調整が施される。体部外面はタタキの後、カキメ調整される。内面には同心円のあて具痕が残る。8世紀後半。平城宮VI。

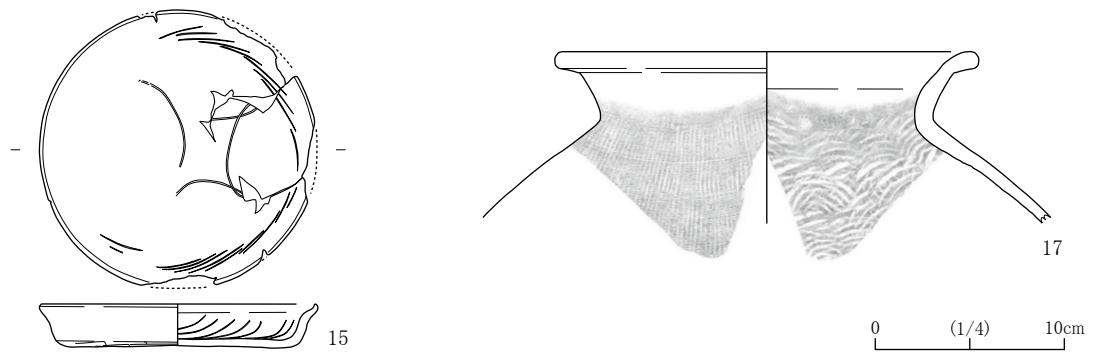
### 3) 包含層出土遺物 (第 13 図)

出土したものには土師器、須恵器、製塩土器、土錐がある。

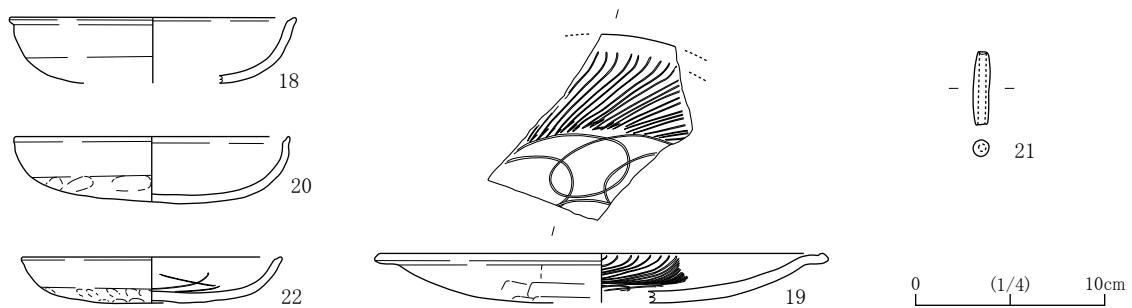
18 は土師器の壺である。体部が緩く立ち上がり、口縁端部がわずかに外反する。ナデにより口縁



第11図 SE2 出土遺物実測図

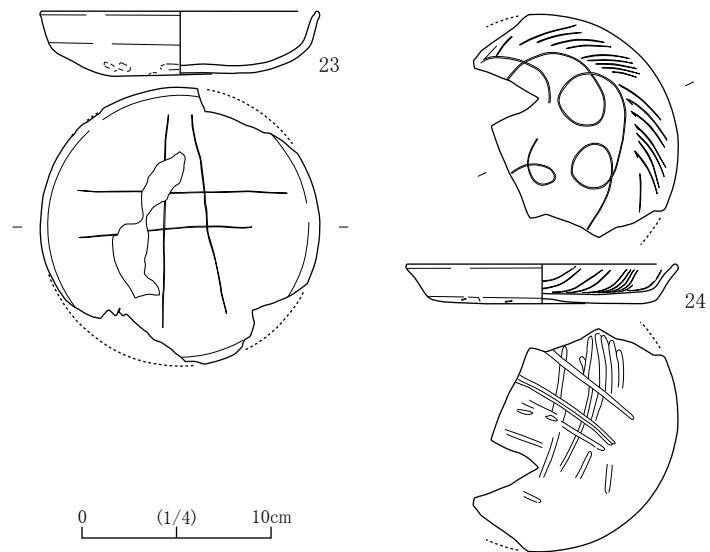


第12図 SK3・SP61 出土遺物実測図



第13図 包含層出土遺物実測図

部外面から内面にかけて調整し、底部外面にはオサエを残す。8世紀中頃。平城宮III。19は土師器の高坏である。体部が浅く、口縁部が外反する。内面には暗文が施される。口縁端部はヨコナデの後、ミガキ調整する。外面はケズリ調整する。8世紀中頃。平城宮III。20は土師器の坏である。体部が緩く立ち上がり、口縁端部がわずかに外反する。ナデにより口縁部外面から内面にかけて調整し、底部外面にはユビオサエの後、ナデ調整をする。8世紀中頃。平城宮III。21は土錘である。22は土師器の坏である。体部が緩やかに立ち上がり、口縁がやや外反する。内面に線刻模様が施される。ナデにより口縁部外面から内面にかけて調整をし、底部外面にはユビオサエを残す。8世紀中頃。平城宮III。図化できなかった遺物として、製塩土器、土師器羽釜、土師器把手が多数出土している。



第14図 試掘調査出土遺物実測図

#### 4) 試掘調査出土遺物（第14図）

確認調査にて出土したものには土師器、須恵器、製塩土器がある。

23、24は土師器の坏である。23の体部は緩やかに立ち上がり、口縁端部を丸く收める。外面底部に格子の線刻模様を施す。ナデにより口縁部外面から内面にかけて調整をし、底部外面にはユビオサエを残す。8世紀前半。平城宮I。24の体部は内湾して立ち上がり、口縁端部を丸く收める。内面にはナデの後、暗文を施す。底部外面はケズリの後、ミガキ調整する。8世紀中頃。平城宮III。

図化できなかった遺物として製塩土器が多数出土している。

## VI まとめ

今回の調査地は瓜生堂遺跡の北西端に位置し、検出した奈良時代から平安時代の遺構からなる古代集落は、8世紀から9世紀中ごろまで存在し、中世集落へ連続しないと考えられる。

第54次調査A地区の遺構面レベルはT.P. 1.35 m～T.P. 1.40 m、D地区がT.P. 1.10 m～T.P. 1.20 mであった。今回の第59次調査の遺構面レベルはT.P. 1.42 m～T.P. 1.50 mであったことからA地区からD地区へわずかに傾斜するものの、東方向へ上がっていき本調査地とA地区はほぼ平坦になっている。出土遺物に関して、土師器平城VI期を主体とした第54次調査に比べると本調査地の出土遺物は一部9世紀のものがあるが概ね8世紀中頃が主体である。しかしながら、製塩土器・胴長の羽釜が多く出土している点では第54次調査の特にA地区と共通する。

このことから今回発見された集落は第54次調査A地区と同一もしくは時期を同じとする隣接する集落と考えられ、III章で触れたように、第54次調査の集落同様に「集落III」に該当する。しかし、SE2の廃絶時期は9世紀中頃と考えられ、長岡京期に収まるにされる第54次調査A地区との差異があることから、集落が少しづつ移動、もしくは縮小していったと推定される。

また、今回の出土遺物の特徴として暗文を施した畿内系土師器が数多く出土した。この点は第54次調査とは異なった特徴である。集落の性質を特定する特徴的な出土遺物として、暗文を施した畿内系土師器の他にも墨書き土器と転用硯が出土したが、各1点ずつ出土したのみにとどまる。また掘立柱建物が国土座標に沿わない方位をとることから官衙に付随する建物とも考えられない。よって今回の調査では官衙の特性を持つ集落とは断定できず、集落性質の特定は今後の調査の課題となる。

第54次調査でこれまで不明であった近鉄八戸ノ里駅周辺に古代集落が存在したことが確認されたが、今回の調査ではそれを追認することができた。

また、本調査トレンチの北側部分に遺構が集中し、掘立柱建物1がトレンチ外の北側部分に続くことが推定されることから、瓜生堂遺跡の範囲をさらに北へ広げる必要があること指摘しておきたい。

#### 【参考文献】

- 古代の土器研究会編 1992 『古代の土器1 都城の土器集成』  
中世土器研究会 1995 『概説 中世の土器・陶磁器』 真陽社  
小森俊寛・上村憲章 1996 「京都の都市遺跡から出土する土器の編年的研究」『研究紀要』 京都市埋蔵文化財研究所  
東大阪市文化財協会 1999 『都市計画道路大阪瓢箪山線建設に伴う瓜生堂遺跡第45次発掘調査概要報告』  
東大阪市教育委員会 2003 『東大阪市埋蔵文化財発掘調査概報－平成14年度－』  
鐘方正樹 2003 『井戸の考古学』 同成社  
東大阪市教育委員会 2009 『東大阪市埋蔵文化財発掘調査概報－平成20年度－』

第2表 遺物観察表

番号	遺構	形式	器種	残存率	残存部	残器高(cm)	径(cm)	外面調整	内面調整	文様	備考
1	SE2	土師器	皿	1/3	口縁～底部	2.1	16.6	口：ヨコナデ 体～底：ユビオサエ、線刻	口：ヨコナデ 底：ナデ、暗文	暗文	外面底部線刻
2	SE2	土製品	土錐	完形	—	3.5	0.95	ナデ	—	—	—
3	SE2	須恵器	壺	3/5	体部～底部	4	5.6	体：ロクロナデ 底：ヘラオコシ	ロクロナデ	—	貼付高台
4	SE2	土師器	羽釜	1/6	口縁～体部	7.1	24.5	口：ヨコナデ 頸：取手貼付時のナデ 体：縦方向ハケ	口～頸：ヨコナデ 体：縦方向ハケ	—	鍔部分貼付(ナデ)
5	SE2	土師器	—	—	把手	4.1	—	ナデ	ナデ	—	内面スス
6	SE2	須恵器	蓋	—	ツマミ	1.5	3.4	ツマミ：貼付時のナデ 肩：ロクロナデ	ロクロナデ	—	ツマミ貼付
7	SE2	土師器	壺	1/6	口縁～頸部	6.8	22.8	口：ヨコナデ・縁ケズリ 頸：ヨコナデ・縦方向ハケ	口：ヨコナデ 頸：横方向ケズリ・縦方向ハケ	—	内面スス
8	SE2	須恵器	蓋	1/4	口縁～肩部	2.1	15	口：ロクロナデ 肩：ケズリ	ロクロナデ	—	転用硯内面墨痕有
9	SE2	須恵器	墨書	—	不明	—	—	不明	不明	—	「乙」力
10	SE2	土師器	坏	1/5	口縁～底部	3	15.4	口：ヨコナデ 体：ロクロ成形のちケズリ	ヨコナデ、暗文	暗文	黒色土器A
11	SE2	土師器	坏	1/6	口縁～底部	2.8	15.2	口：ヨコナデ 体：ユビオサエのちナデ	ヨコナデ	—	—
12	SE2	土師器	甕	1/4	口縁～体部	5.2	19	口：ヨコナデ 頸：ハケのちヨコナデ 体：縦方向ハケ	口：ヨコナデ 頸：ケズリ 体：ヨコナデ	—	外面スス内面沈線
13	SE2	土師器	甕	2/5	口縁～底部	14	18.4	口：ヨコナデ 体：ハケ	口：ヨコナデ 頸：ハケのち横方向ケズリ 体：縦方向ハケ	—	内外面スス
14	SE2	種子	モモ	完形	—	3.2	—	—	—	—	写真のみ
15	SK3	土師器	坏	9/10	口縁～底部	2.4	口：14.7 底：12.8	口：ヨコナデ 底：ユビオサエのちケズリ	口：ヨコナデ 体：ヨコナデのち暗文 底：ナデのち暗文	暗文	—
16	SP21	土師器	皿	1/8	口縁部	2.1	—	不明	不明	—	写真のみ
17	SP61	須恵器	甕	1/3	口縁～体部	9.1	22.4	口：ロクロナデ 体：縦方向タタキのちカキメ	口：ロクロナデ 体：同心円あて具痕	—	—
18	包含層	土師器	坏	1/4	口縁～体部	3.5	15.2	口：ヨコナデ 体：ケズリ・オサエ	ヨコナデ	—	—
19	包含層	土師器	高坏	1/8	口縁～体部	2.6	24	口：回転ケズリ 体：ケズリ	口：ヨコナデのちミガキ 体：放射状暗文 底：暗文	暗文	—
20	包含層	土師器	坏	7/10	口縁～底部	3.6	14.6	口：ヨコナデ 体：ユビオサエのちナデ	ヨコナデ	—	—
21	包含層	土製品	土錐	完形	—	3.9	0.9	ナデ	—	—	—
22	包含層	土師器	坏	2/5	口縁～底部	2.5	13.8	口：ヨコナデ 底：ユビオサエ	口：ヨコナデ 底：ナデ、線刻	内面線刻	—
23	試掘	土師器	坏	7/10	口縁～底部	3.5	14.8	口：ヨコナデ 底：ユビオサエ、線刻	口：ヨコナデ 底：ナデ	外面線刻	—
24	試掘	土師器	坏	1/3	口縁～底部	2.1	口：14.4 底：12	口：ヨコナデ 底：ケズリのちミガキ	口：ヨコナデ、放射状暗文 底：ナデ、暗文	暗文	—

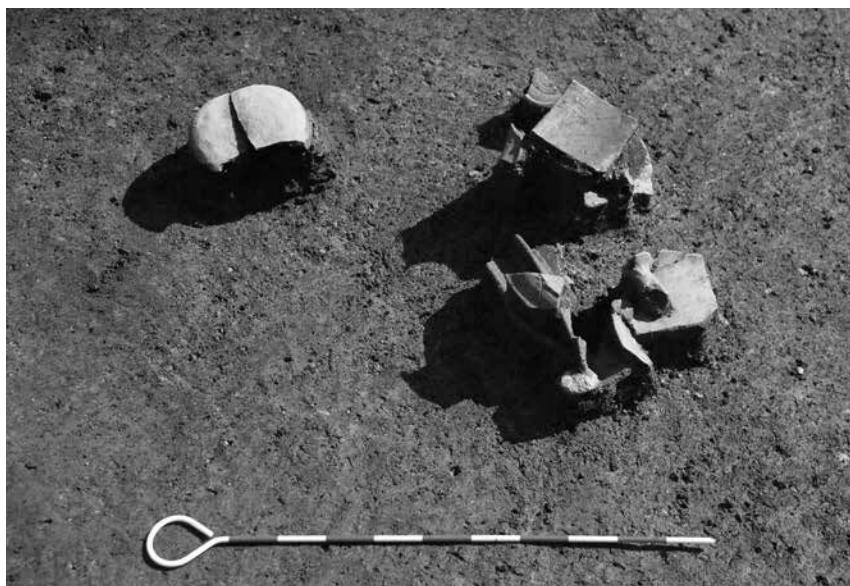
図版1 遺構



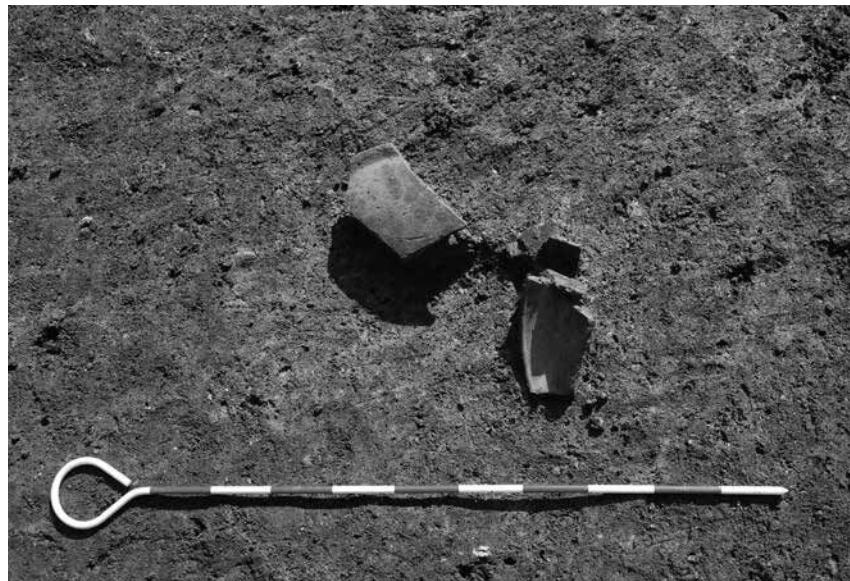
1. 調査前の状況  
(南東から)



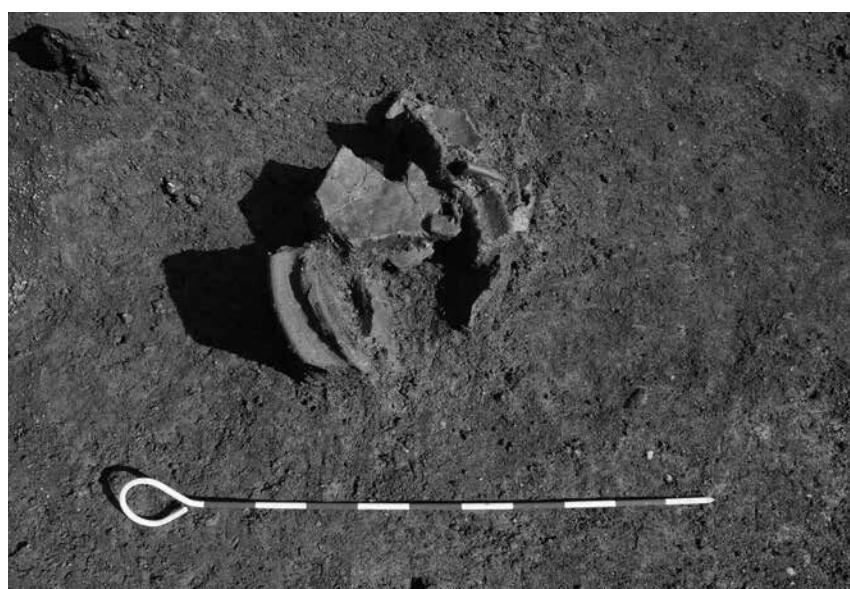
2. 機械掘削状況  
(北東から)



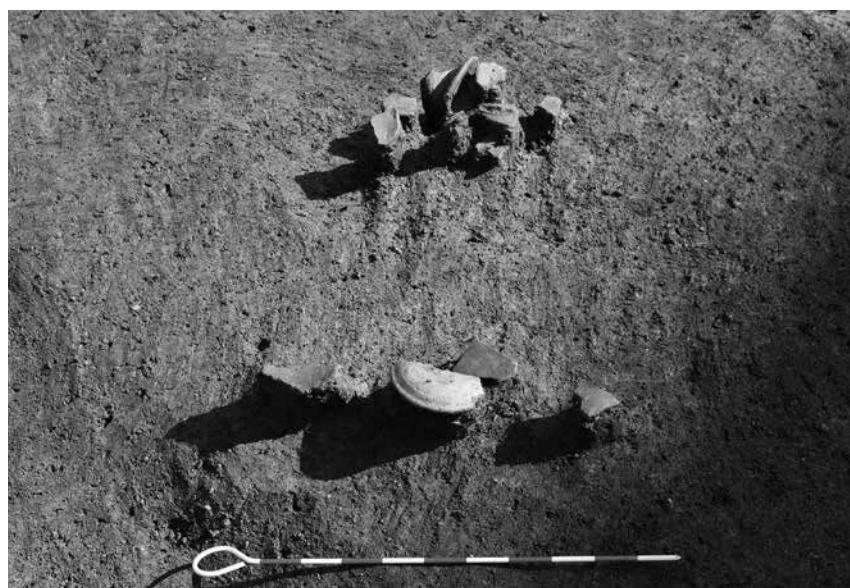
3. 3A(S) 区 第4層内  
土器出土状況 (北から)



1. 3A(S) 区 第4層内  
土師器皿他出土状況  
(北から)



2. 3A(S) 区 第4層内  
土師器羽釜一括  
出土状況 (北から)



3. 3A(S) 区 第4層内  
土器出土状況 (北から)

1. 奈良～平安時代遺構  
検出状況（西から）



2. 調査風景（北西から）



3. SK3 内土師器皿  
出土状況（東から）

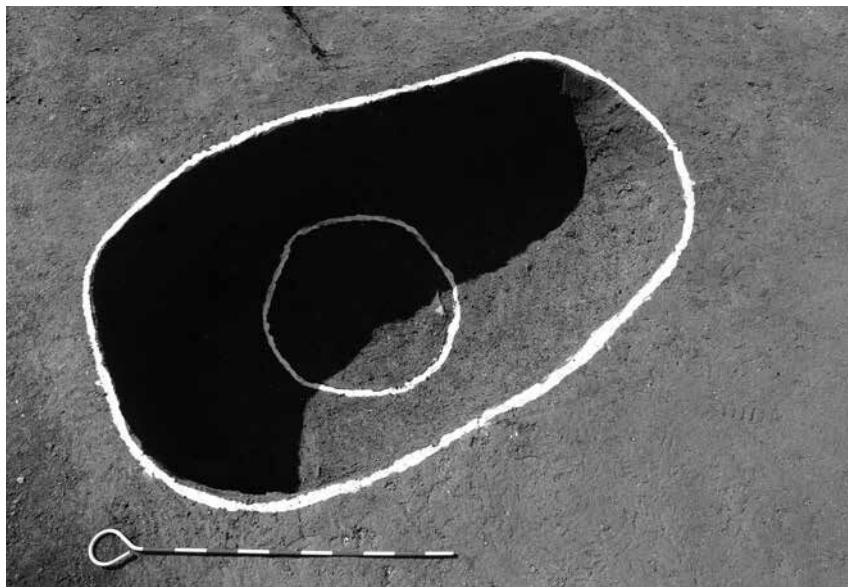




1. SP61 内 須恵器  
出土状況 (東から)

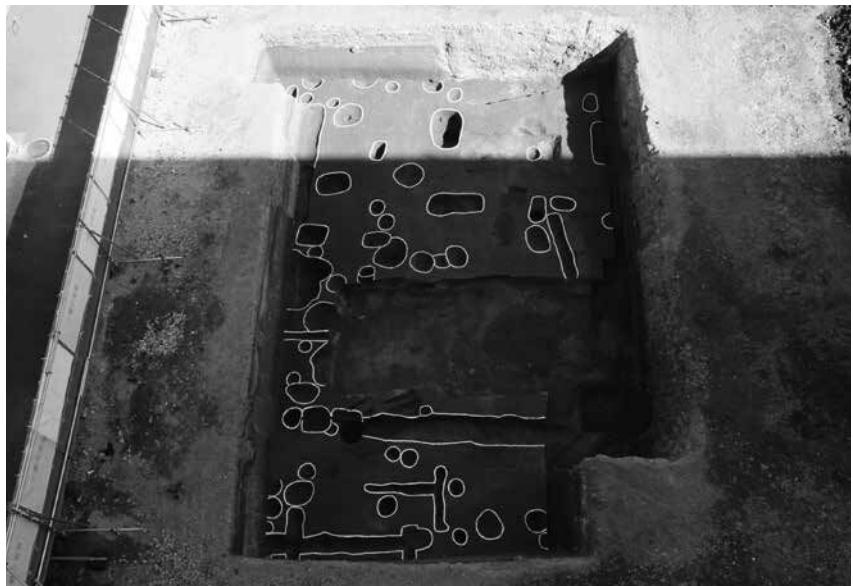


2. SD8 断面  
土層堆積状況 (南から)



3. SK3 柱痕跡  
検出状況 (東から)

1. 奈良～平安時代遺構  
掘削後の状況（西から）

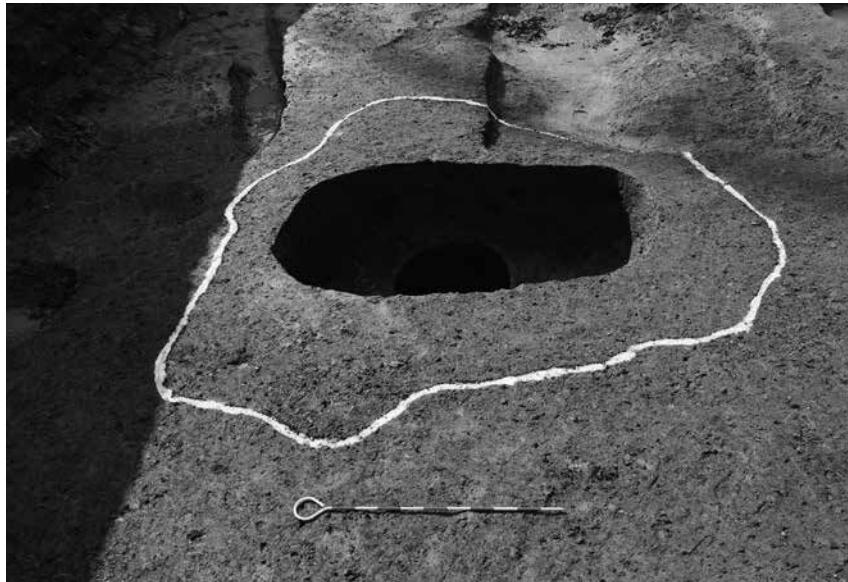


2. 同上、西半の近景  
(南から)

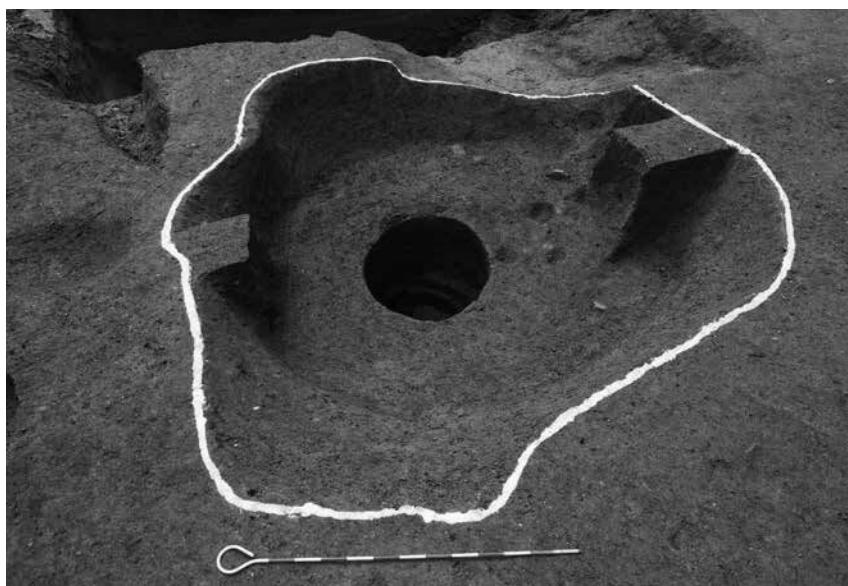


3. 同上、東半の近景  
(北から)





1. SE2 検出状況 (南から)



2. SE2 上層掘削後状況  
(南から)



3. SE2 断ち割り  
井戸枠検出状況  
(南から)



1. SE2 井戸枠（曲物）内  
遺物出土状況（東から）



2. SE2 掘形掘削後  
曲物全景検出状況  
(南から)



3. トレンチ西壁断面  
(A地点～B地点)



1. トレンチ北壁断面  
(B地点～C地点)



2. 調査作業終了後  
埋戻し状況 (北西から)



3. 調査終了  
埋戻し完了状況  
(南西から)



1. SE2 出土 土師器壺



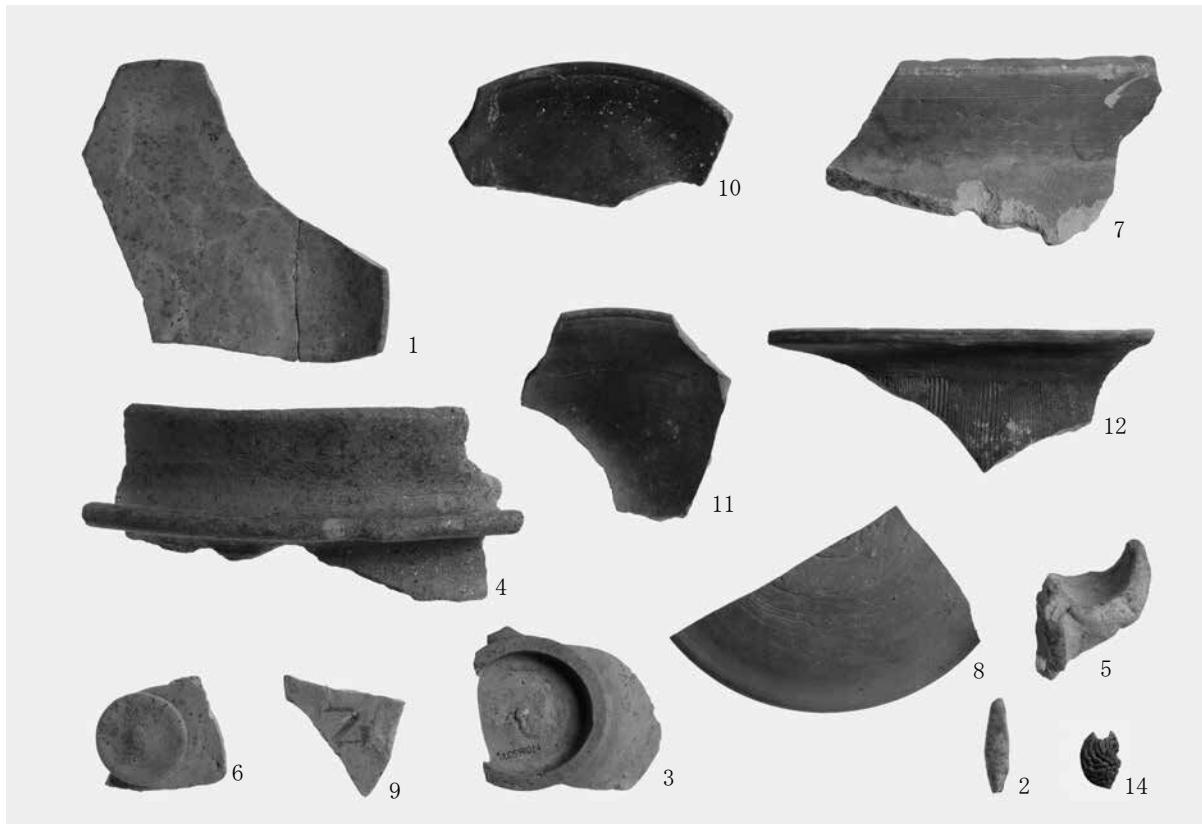
2. SK3 出土 土師器壺



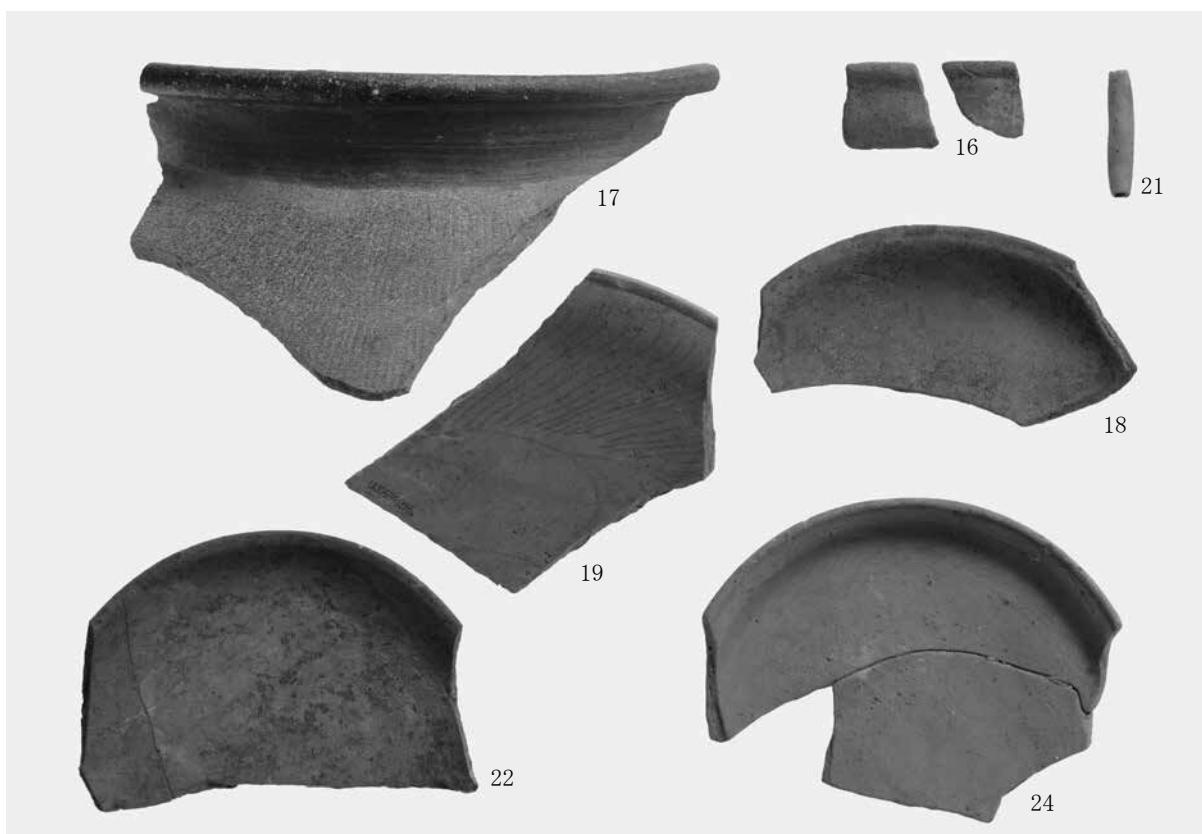
3. 包含層出土 土師器壺



4. 試掘調査出土 土師器壺



1. SE2 出土遺物 土師器、須恵器、黒色土器、土製品、種子



2. 各遺構出土遺物 土師器、須恵器、土製品

## 報告書抄録（その1）

ふりがな	うりゅうどういせきだい 59 じはっくつちょうさほうこくしょ					
書名	瓜生堂遺跡第59次発掘調査報告書					
副書名						
巻次						
シリーズ名						
シリーズ番号						
編集者名	菅原章太・平松里緒・近野奈緒子					
所在地	〒577-8521 東大阪市荒本北一丁目1番1号					
発行年月日	2024年3月31日					
ふりがな 所収遺跡	所在地	市町村 コード	遺跡番号	調査機関	調査面積	調査原因
うりゅうどういせき 瓜生堂遺跡	東大阪市 下小阪 五丁目 40番3	27227	95	令和5年 2月2日～ 2月28日	98 m <sup>2</sup>	共同住宅 建設

## 報告書抄録（その2）

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
瓜生堂遺跡 (第59次調査)	集落跡	奈良時代	井戸跡 溝 土坑	土師器、須恵器、 黒色土器、 土製品、種子	

## 瓜生堂遺跡第59次発掘調査報告書

発行日 令和6年3月31日

編集・発行 東大阪市

〒577-8521

東大阪市荒本北一丁目1番1号

TEL 06-4309-3283

印刷所 三星商事印刷株式会社